第４９号

茨城の幼児教育

幼保小の学びのつながり

令和６年３月

茨城県教育委員会

ま　え　が　き

本県では、幼児教育の充実を図ることを目的に、昭和44年度から「茨城の幼稚園教育」（平成27年度からは「茨城の幼児教育」と名称を変更）を発行しております。ペーパーレス、ＩＣＴ活用の時代背景から、令和５年度よりは茨城県教育委員会のホームページから必要な部分をダウンロードして活用いただくこととしています。

本指導資料では、幼児教育における現代的な課題を研究テーマとして取り上げ、各幼児教育施設において保育実践の参考となるような具体的な実践事例等を多数掲載してきました。

今年度の「茨城の幼児教育第49号」では「幼保小の学びのつながり」を研究テーマとして取り上げました。文部科学省は、幼児教育と小学校教育との円滑な接続と、接続期の保育・教育の充実を図ることを目的として、「幼保小の架け橋プログラム」の実施などの取組みを推し進めています。

昨年度の第48号では、「幼保小の架け橋期における保育・教育の質の向上」をテーマに、幼稚園、幼保連携型認定こども園、保育所、小学校それぞれから、保育・教育の優れた実践例を紹介しました。

本号はそれをさらに進め、「学びのつながり」に焦点を当てて保育・教育の実践例を掲載しています。また、ＩＣＴでの活用を意識して、表記の形式等にも工夫をしています。

架け橋期の保育・教育に携わる全ての方々が、子どもたちの可能性を信じ、ねらいを明確にして日々の取組を充実させていくことが、子どもたちの健やかな成長を促すと考えます。本資料につきましては、幼児教育施設だけでなく小中学校の方々にもぜひご一読いただき、園内・校内での研修で使用していただくなどして、それぞれの施設での保育・教育の充実に役立てていただくことを願っています。

結びになりますが、本指導資料の作成にあたり、多大なご尽力をいただきました作成委員の皆様に、心から感謝を申し上げます。

令和６年３月

茨城県教育庁学校教育部義務教育課長
若松　裕一

目　　次

Ⅰ　幼児教育の現状
1　幼児教育の概要 1
2　全国の幼児教育施設の状況 2
3　本県の幼児教育施設の状況 3
4　令和５年度幼児教育関連事業概要 6

Ⅱ　幼保小の学びのつながり
1　実践事例解説 9
2　実践事例一覧 11
3　実践事例 12

Ⅲ　令和５年度茨城県幼児教育研究推進校の取組
1　常陸太田市立太田進徳幼稚園の実践 36
2　つくば市立大穂幼稚園の実践 48

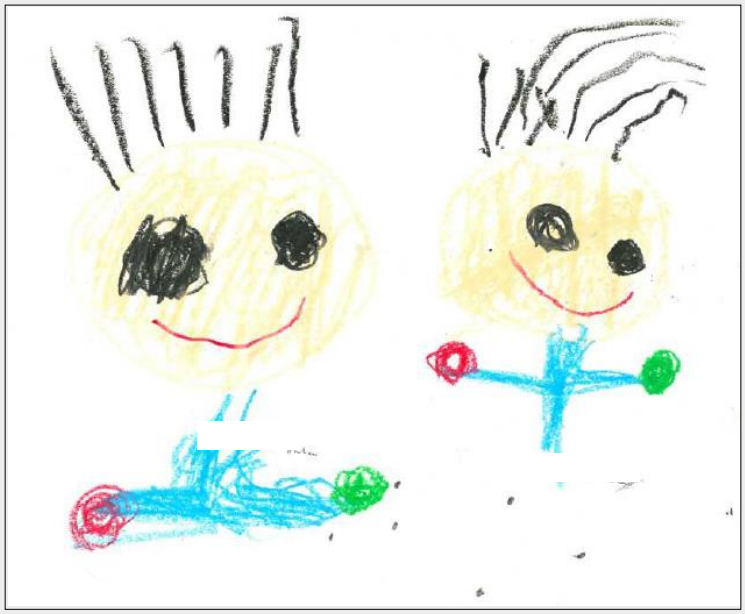
Ⅳ　令和５年度幼稚園教育理解推進事業茨城県協議会研究成果の要旨
1　共通協議主題 50
「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論等を踏まえ、
幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について
2　協議主題２ 54
指導計画の作成、保育の展開、指導の過程の評価・改善について

Ⅴ　資　料
・家庭教育応援ナビ「すくすく育て　いばらきっ子」 60
・幼児教育関係資料一覧 61
・県主催研修に係る欠席届及び連絡・提出先 67
・「茨城の幼児教育第 49 号」作成協力者 68

表紙の絵　「　いもほり　」
学校法人慈恵学園認定こども園栄幼稚園　　５歳児

Ⅰ　幼児教育の現状

１　幼児教育の概要
２　全国の幼児教育施設の状況
３　本県の幼児教育施設の状況
４　令和５年度幼児教育関連事業概要



「うんどうかいのポンポンダンス」
常陸大宮市立美和認定こども園　３歳児

１　幼児教育の概要

◆　**幼稚園設置状況及び在園児数**

令和５年度学校基本調査によると、５月１日現在で全国の幼稚園数は 8,837 園（国立 49 園、公立 2,744 園、私立 6,044 園）と、前年度より 274 園（公立 166 園、私立 108 園）減少し、在園児数は 841,824 人で 81,471 人減少しています。

本県での状況は、幼稚園数 196 園（休園 4 園）で、前年度より 10 園（公立７園、私立３園）減少し、在園児数は 1,606 人減少しています。

◆　**幼保連携型認定こども園設置状況**

令和５年度学校基本調査によると、５月１日現在で全国の幼保連携型認定こども園数は 6,982 園（公立 948 園、私立 6,034 園）と、前年度より 325 園増加し、在園児数は 843,280 人で 21,869 人増加しています。

本県での状況は、幼保連携型認定こども園数 175 園（公立 21 園、私立 154 園）で、前年度より３園（私立３園）増加し、在園児数は 450 人増加しています。

◆　**国の動き**

(1)　「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について ～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」（令和５年２月 27 日中央教育審議会初等中等教育分科会 幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会）において、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、全ての子供に等しく機会を与えて育成していくことが必要」としたうえで、以下の方策を推進するとしました。　※【　】内は対象

１．架け橋期の教育の充実
　①　子供の発達の段階を見通した架け橋期の教育の充実【幼・小】
　②　架け橋期のカリキュラムの作成及び評価の工夫による PDCA サイクルの確立【幼・小】

２．幼児教育の特性に関する社会や小学校等との認識の共有
　①　幼児教育の特性に関する認識の共有【幼・小】
　②　ＩＣＴの活用による教育実践や子供の学びの見える化【幼】

３．特別な配慮を必要とする子供や家庭への支援
　①　特別な配慮を必要とする子供と家庭のための幼保小の接続【幼・小】
　②　好事例の収集【幼・小】

４．全ての子供に格差なく学びや生活の基盤を育むための支援
　①　幼児教育施設の教育機能と場の提供【幼】
　②　全ての子供のウェルビーイングを保障するカリキュラムの実現【幼・小】

５．教育の質を保障するために必要な体制等
　①　地方自治体における推進体制の構築【幼・小】
　②　架け橋期の教育の質保障のために必要な人材育成等【幼・小】
　③　幼児期の教育の質保障のために必要な人材確保・定着等【幼】

６．教育の質を保障するために必要な調査研究等
　①　幼保小接続期の教育に関する調査研究【幼・小】
　②　幼児期の教育に関する調査研究【幼】

※　幼保小の架け橋プログラム事業（架け橋期のカリキュラムの開発や実施等）に取り組む 19 の自治体の取組状況は、文部科学省のＨＰ（トップ > 教育 > 幼児教育 > 幼保小の架け橋プログラム https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1258019_00002.htm）で紹介されています。

(2)　不適切保育への対策として、文部科学省は令和５年５月12日付け通知「昨年来の保育所等における不適切事案を踏まえた今後の対策について」で、ガイドラインの策定、児童福祉法の改正による制度的対応の検討、虐待等の未然防止に向けた保育現場の負担軽減と巡回支援の強化等を周知し、幼稚園等についても同様の取組を求めました。

2　全国の幼児教育施設の状況

(1)　幼稚園数・学級数・在園児数

■令和５年度の設置者別統計　　（令和５年５月１日現在　学校基本調査による）

区分		合計	国立	公立	私立
幼稚園数（園）		8,837	49	2,744	6,044
学級数（学級）		44,877	219	7,109	37,549
在園児数（人）	３歳児(満３歳児含)	247,124	1,157	21,336	224,631
	４歳児	281,127	1,568	33,361	246,198
	５歳児	313,573	1,765	43,192	268,616
	計	841,824	4,490	97,889	739,445

※「満３歳児」とは、満３歳に達する日以降の翌年度４月１日を待たずに随時入園した者である。
※「０人」の学級も含む。
※分園も１園として計上している。

(2)　幼保連携型認定こども園数・学級数・在園児数

■令和５年度の設置者別統計　　（令和５年５月１日現在　学校基本調査による）

区分		合計	国立	公立	私立
認定こども園数（園）		6,982	—	948	6,034
学級数（学級）		30,772	—	4,271	26,501
在園児数（人）	０歳児	30,180	—	2,494	27,686
	１歳児	97,994	—	9,934	88,060
	２歳児	113,297	—	12,203	101,094
	３歳児	194,674	—	22,336	172,338
	４歳児	200,229	—	24,775	175,454
	５歳児	206,906	—	26,656	180,250
	計	843,280	—	98,398	744,882

※「０人」の学級も含む。
※分園も１園として計上している。

(3)　保育所数・在園児数

■令和５年度の統計　　（令和５年５月１日現在　福祉行政報告例による）

区分		合計	国立	公立	私立
保育所数（園）		23,775	—	—	—
在園児数（人）	０歳児数	105,960	—	—	—
	１・２歳児数	660,927	—	—	—
	３歳児数	385,438	—	—	—
	４歳以上児数	781,247	—	—	—
	計	1,933,572	—	—	—

3　本県の幼児教育施設の状況

(1)　幼稚園数・学級数・在園児数

■令和５年度の設置者別統計　　（令和５年５月１日現在　学校基本調査による）

区分		合計	国立	公立	私立
幼稚園数（園）		196	1	84	111
学級数（学級）		899	5	223	671
在園児数（人）	３歳児(満３歳児含)	4,547	28	534	3,985
	４歳児	5,452	38	1,018	4,396
	５歳児	6,262	48	1,307	4,907
	計	16,261	114	2,859	13,288

※「０人」の学級も含む。
※分園も１園として計上している。

(2)　幼保連携型認定こども園数・学級数・在園児数

■令和５年度の設置者別統計　　（令和５年５月１日現在　学校基本調査による）

区分		合計	国立	公立	私立
認定こども園数（園）		175	—	21	154
学級数（学級）		859	—	94	765
在園児数（人）	０歳児	597	—	55	542
	１歳児	2,211	—	207	2,004
	２歳児	2,663	—	249	2,414
	３歳児	5,139	—	422	4,717
	４歳児	5,470	—	524	4,946
	５歳児	5,871	—	590	5,281
	計	21,951	—	2,047	19,904

※分園も１園として計上している。

(3)　保育所数・在園児数

■令和５年度の設置者別統計　　（令和５年５月１日現在　福祉行政報告例による）

区分		合計	国立	公立	私立
保育所数（園）		463	—	117	346
在園児数（人）	０歳児	2,127	—	310	1,817
	１歳児	6,287	—	1,125	5,162
	２歳児	7,211	—	1,424	5,787
	３歳児	8,056	—	1,713	6,343
	４歳児	8,324	—	1,836	6,488
	５歳児	8,458	—	1,899	6,559
	計	40,463	—	8,307	32,156

(4)　市町村別幼稚園・幼保連携型認定こども園・保育所数

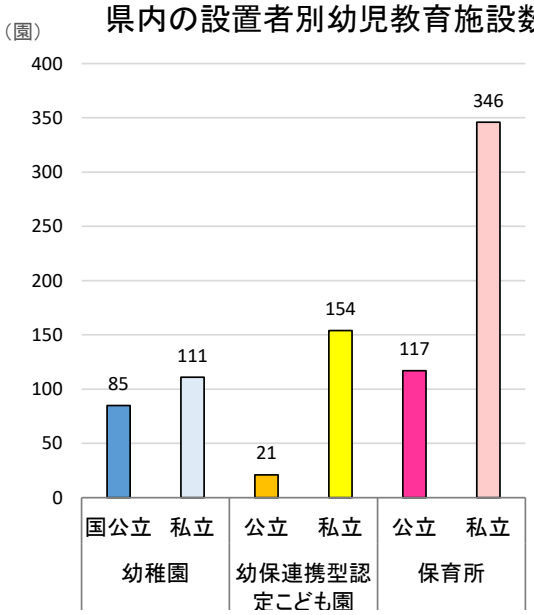
（単位；園）

管内	区分 / 市町村名	幼稚園数 計	幼稚園数 国公立	幼稚園数 私立	幼保連携型認定こども園数 計	幼保連携型認定こども園数 公立	幼保連携型認定こども園数 私立	保育所数 計	保育所数 公立	保育所数 私立
水戸教育事務所	水戸市	25①	11①	14	7	2	5	61	11	50
	笠間市	5		5	5		5	5	2	3
	ひたちなか市	10	4	6				23	4	19
	常陸大宮市	1	1		5	1	4	8	2	6
	那珂市	3	1	2	2		2	7	1	6
	小美玉市	4	3	1	4		4	8		8
	茨城町	4	3	1	4		4	3		3
	大洗町	3(2)	3(2)					4	1	3
	城里町				2		2	2	1	1
	東海村	5	4	1	3	1	2	7	3	4
	大子町	1	1					5	3	2
	水戸計	61①(2)	31①(2)	30	32	4	28	133	28	105
県北教育事務所	日立市	12	3	9	13	2	11	18	9	9
	常陸太田市	2	2		5	4	1	6	2	4
	高萩市	1	1		2	1	1	3		3
	北茨城市	4		4				5	1	4
	県北計	19	6	13	20	7	13	32	12	20
鹿行教育事務所	鹿嶋市	4	4		7	1	6	10	3	7
	潮来市				9	1	8			
	神栖市	4	4		6	2	4	20	1	19
	行方市	3	3		4		4	4		4
	鉾田市	4	4		3		3	6	2	4
	鹿行計	15	15	0	29	4	25	40	6	34
県南教育事務所	土浦市	11		11	4		4	21	5	16
	石岡市	5		5	2		2	13	4	9
	龍ケ崎市	4		4	6		6	8	1	7
	取手市	6	1	5	8		8	13	5	8
	牛久市	5	2	3	2		2	14	3	11
	つくば市	24(2)	17(2)	7	6		6	72	23	49
	守谷市	5		5	1		1	19	2	17
	稲敷市	3	3		3	2	1	2		2
	かすみがうら市	1		1	2		2	7	3	4
	つくばみらい市	4	3	1	4		4	14	4	10
	美浦村	1	1					2	2	
	阿見町	2		2	2		2	8	3	5
	河内町				1	1		1	1	
	利根町	2		2	1		1	2		2
	県南計	73(2)	27(2)	46	42	3	39	196	56	140
県西教育事務所	古河市	7		7	12		12	17	4	13
	結城市	3		3	1		1	10	3	7
	下妻市	5	2	3				7	2	5
	常総市	3	2	1	4		4	10	5	5
	筑西市	3	1	2	21	1	20	2		2
	坂東市	2	1	1	6	2	4	3		3
	桜川市				2		2	4	1	3
	八千代町	3		3	1		1	5		5
	五霞町				2		2			
	境町	2		2	3		3	4		4
	県西計	28	6	22	52	3	49	62	15	47
県合計		196①(4)	85①(4)	111	175	21	154	463	117	346

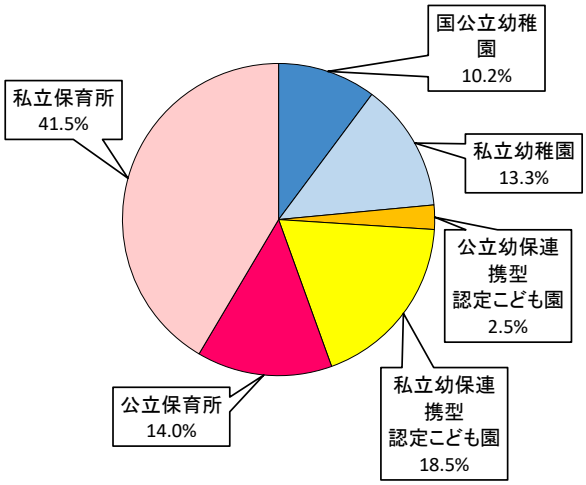
※ ○は国立数（内数）　（　）内は休園数（内数）　（令和５年５月１日現在）

※ 幼稚園には幼稚園型認定こども園を含む。保育所には保育所型認定こども園を含む。

県内の設置者別幼児教育施設数

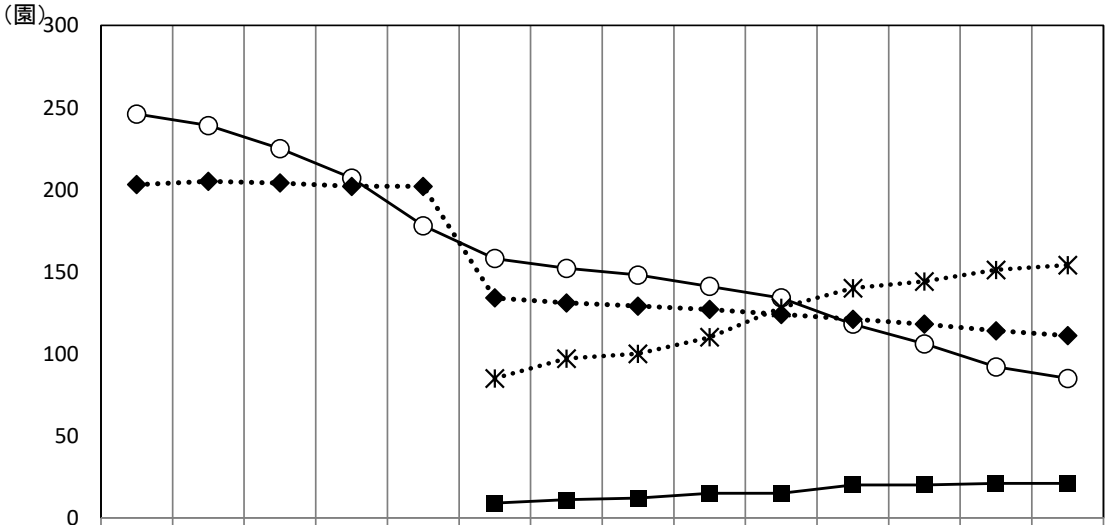


県内の設置者別幼児教育施設数の割合



※認定こども園のうち、幼稚園型は幼稚園に、保育所型は保育所に含めている。

幼稚園・幼保連携型認定こども園数の推移



	平成2年	7	12	17	22	27	28	29	30	令和元年	2	3	4	5
国公立幼	246	239	225	207	178	158	152	148	141	134	118	106	92	85
私立幼	203	205	204	202	202	134	131	129	127	124	121	118	114	111
公立認定こ						9	11	12	15	15	20	20	21	21
私立認定こ						85	97	100	110	128	140	144	151	154

注　平成27年4月から子ども・子育て支援法の施行により、一部の幼稚園は認定こども園へ移行して いる。

（学校基本調査による）

４　令和５年度　幼児教育関連事業概要　　※義務教育課事業

(1)　研修事業

①　新規採用教員研修（幼児教育）　※平成４年度開始

平成29年度から現在の名称になった。園外研修７日間、園内研修10日間（公立幼稚園及び公立幼保連携型認定こども園には研修指導員を派遣）からなっている。

《園外研修》

回	期　日	会　　場	内　　容	参加状況
1	５月22日	県教育研修センター	○講義「服務と心構え、安全管理」 ○講義「園教育の基本」 ○講義「人権教育の推進」	公立幼　14名 私立幼　10名 公立認こ12名 私立認こ34名 公立保　7名 私立保　14名 国立　1名 特支　1名 計　93名
2	６月12日	県教育研修センター	○講義・協議「学級経営の意義 ～園内保育参観を通して～」 ○講義･演習「乳幼児理解に基づいた評価」	
3	７月13日	県教育研修センター	○講義・実習「読み聞かせの基本と実際」 ○講義・実習「ICTの活用」	
4	８月２日	県教育研修センター	○講義「教育課程と指導計画」 ○演習「指導計画の作成」	
5	８月24日	堀原運動公園大道場	○講義・実習「救急処置・食物アレルギーへの対応」 ○実習「運動遊び・伝承遊び」	
6	１班 10月24日 ２班 10月５日 ３班 11月21日	水戸飯富特別支援学校 石岡特別支援学校 下妻特別支援学校	○実習「特別支援学校における体験研修」 ○研究協議「特別な配慮を要する幼児・児童への対応」	
7	１月19日	県教育研修センター	○講義「小学校教育との接続･連携」 ○講義「家庭との連携・保護者への対応」 ○協議「１年間を振り返って」	

②　中堅教諭等〔前期〕資質向上研修（幼児教育）　※平成15年度開始

教育公務員特例法の規定に基づき、教職経験６年次に当たる教諭、保育教諭を対象に、個々の能力、適性等に応じた１年間の研修を実施し、教諭等としての資質の向上を図ることを目的とする。

公立幼稚園及び幼保連携型認定こども園の対象者は悉皆で、私立幼稚園及び幼保連携型認定こども園、公私立保育所の対象者は希望により、園外研修５日、園内研修５日を行った。

《園外研修》

回	期　日	会　　場	内　　容	参加状況
1	５月30日	県教育研修センター	○講義「ミドルリーダーに求められる資質・能力」 ○講義「小学校教育との円滑な接続に向けて」 ○情報交換「実践研究について」	〈悉皆研修〉 公立幼　29名 公立認こ16名 〈希望研修〉 私立幼　2名 私立認こ　1名 公立保　3名 私立保　1名 計　52名
2	6月30日 ７月18日	県南生涯学習センター 県教育研修センター	※　第１回保育技術専門研修に参加 ○講義・演習「障がいのある幼児の理解と対応」	
3	8月10日	県教育研修センター	※　幼児教育教育課程研究協議会に参加 ○基調講演「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けて」 ○研究協議 協議主題２：「指導計画の作成、保育の展開、指導の過程の評価・改善について」	
4	10月11日	県教育研修センター	※　第２回保育技術専門研修に参加 ○講義・実習「読み聞かせ研修」 ○講義・実習「幼児期の運動遊び」	
5	１月31日	オンライン	○実践報告会「学級経営の工夫」 ○協議「中堅教諭としての役割」	

③　中堅教諭等〔後期〕資質向上研修（幼児教育）　※令和２年度開始

教育公務員特例法の規定に基づき、教職経験12年次に当たる教諭、保育教諭を対象に、個々の能力、適性等に応じた１年間の研修を実施し、教諭等としての資質の向上を図ることを目的とする。

公立幼稚園及び幼保連携型認定こども園の対象者は悉皆で、私立幼稚園及び幼保連携型認定こども園の対象者は希望により、園外研修５日、園内研修５日を行った。

《園外研修》

回	期　日	会　　場	内　　容	参加状況
1	５月25日	県教育研修センター	○講義「人権を尊重した教育・保育」 ○講義「ミドルリーダーに求められる資質・能力」 ○情報交換「実践研究について」	〈悉皆研修〉 公立幼　5名 公立認こ 4名 〈希望研修〉 私立認こ1名 私立幼　2名 公立保　1名 計　13名
2	６月15日	県教育研修センター	○講義・演習「園内研修の効果的な進め方」	
3	9月～12月	各小学校	○体験「小学校における体験研修」	
4	11月16日	県教育研修センター	※　第３回保育技術専門研修に参加 ○講義・演習「写真を活用した幼児理解」	
5	１月25日	オンライン	○実践報告会「園内研修推進の成果と課題」 ○研究協議「中堅教諭としての役割」	

④　保育技術専門研修　　※平成５年度開始

平成５年度に「保育技術専門講座」として開設された国委嘱事業であるが、平成12年度に「保育技術協議会」、平成30年度に現在の名称になった。幼児教育施設の教員等に対して、保育技術に関する専門的な講義や実習等を行うことにより、幼児期にふさわしい生活を展開し、適切な指導を行うために必要な技術の向上を図る。中堅教諭等[前期・後期]資質向上研修（幼児教育）を兼ねる。

期	期　日	会　　場	内　　容	参加状況
1	６月30日 ７月18日	県南生涯学習センター 県教育研修センター	○講義・演習「障がいのある幼児の理解と対応」	公立幼　50名 私立幼　10名 公立認こ36名 私立認こ28名 公立保　62名 私立保　41名 県立　　1名 行政　　2名 計　230名
2	10月11日	県教育研修センター	○講義・実習「読み聞かせ研修」 ○講義・実習「幼児期の運動遊び」	
3	11月16日	県教育研修センター	○講義・演習「写真を活用した幼児理解」	

※　第1回・第2回には中堅教諭等〔前期〕資質向上研修受講者52名、第3回には中堅教諭等〔後期〕資質向上 研修受講者13名を含む。

⑤　幼児教育教育課程研究協議会　※平成12年度開始

平成30年度までは「幼稚園教育課程研究協議会」という名称であったが、令和元年度から現在の名称となった。幼稚園教育理解推進事業（都道府県協議会）を受けて、幼稚園等の教育課程の編成及び実施に伴う指導上の諸課題等についての研究協議を行うことにより、日々の実践や各幼稚園等における教育課程等を見直し、幼児教育の充実を図る。

期　日	会　　場	内　　容	参加状況
８月10日	県教育研修センター	○基調講演「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けて」 ○研究協議 共通協議主題：「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論等を踏まえ、幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について 協議主題２　：指導計画の作成、保育の展開、指導の過程の評価・改善について ※　共通協議主題又は協議主題２のどちらかを選択	公立幼　57名 私立幼　 4名 公立認こ26名 私立認こ 8名 公立保　10名 私立保　 6名 県立　　1名 国立　　1名 行政　　2名 計　115名

※　中堅教諭等〔前期〕資質向上研修受講者52名を含む。

⑥　園長等専門研修　※平成12年度開始

平成６年度に「園長等専門講座」として開設された国委嘱事業であるが、平成12年度に「園長等運営管理協議会」、平成30年度に現在の名称となった。幼稚園及び幼保連携型認定こども園の初任園長等を対象とし、園の運営や管理、保幼小の接続等について専門的な研修を行う。

回	期　日	会　　場	内　　容	参加状況
1	５月16日	オンライン	○講義「不適切保育の未然防止・危機管理」 ○講義「園長のリーダーシップの在り方」	公立幼　17名 私立幼　 1名 公立認こ 6名 私立認こ21名 公立保　11名 私立保　37名 計　93名
2	９月28日	県教育研修センター	○実践発表・情報交換「園の『チーム力』の上のために」 ○講義･研究協議「小学校教育との連携・接続の在り方」	

⑦　幼児教育担当指導主事等研修会　※昭和45年度開始

幼児教育の在り方について情報交換や協議を通して共通理解を図り、指導主事等の資質の向上及び幼児教育に係る各種事業の円滑な実施を図る。

回	期　日	会　　場	内　　容	参加状況
1	４月14日	オンライン	○報告・協議「本年度の各種事業について」	県　　15名
2	６月７日	オンライン	○講義「幼稚園等の教育において大切にしたいこと」 ○講義「保育者と小学校教員の相互理解を図り、接続カリキュラムの改善につなぐ」	市町村　62名 県　　16名 計　78名
2	２月２日	オンライン	○協議「各種事業についての反省と次年度の事業」	県　　15名

(2)　幼児教育指導資料作成会議（「茨城の幼児教育第49号作成」）　※昭和43年度開始

幼児教育における当面の課題をとらえ、教育課程の編成や指導方法等の改善を図るための研究を行うとともに、研究成果を幼児教育指導資料として取りまとめ、県下の幼児教育施設に配付し、本県の幼児教育の充実に資する。

回	期　日	会　　場	内　　容	参加状況
1	６月２日	県教育研修センター	○研究テーマに基づく実践事例作成 テーマ：「幼保小の学びのつながり」 ○県幼児教育研究推進校による保育実践研究　等	学識経験者 1名 公私立幼　 2名 公私立認こ 2名 公私立保　 2名 小学校教諭 2名 研究推進校 2名 県　　8名 計　19名
2	６月16日			
3	11月６日			
4	１月16日			

(3)　幼児教育に関する実践的調査研究事業（県幼児教育研究推進校）

幼稚園、認定こども園における教育課程及び保育課程の編成の在り方、指導方法等幼児教育の当面している課題を実践を通して解明するため、県教育長が幼児教育推進校を指定し、当該研究推進校を所管する市町村及び市町村教育委員会に幼児教育に関する実践的調査研究事業を委託する。研究の成果については、幼児教育指導資料（掲載）及び幼児教育指導方針説明（ウェブ配信）で発表する。

年　度	研究推進校	研　究　主　題
令和４・５年度	常陸太田市立 太田進徳幼稚園	豊かな感性を育み、自分の思いを素直に表現する幼児を育てる支援の在り方 ～幼児理解を図るドキュメンテーションの活用を通して～
令和５・６年度	つくば市立大穂幼稚園	幼児期における豊かな遊びの創造 ～小規模園におけるよりよい保育を目指した園内研修を通して～

Ⅱ　幼保小の学びのつながり

１　実践事例解説
　「これからの時代を生きる子どもたちの育ちと学びをつなぐ
　　保育・教育～架け橋期のカリキュラムについて考える～」
２　実践事例一覧
３　実践事例

「わたしのかお」
　稲敷市立みのり幼稚園　４歳児

「むしのおさんぽ」
　学校法人常福寺学園豊里もみじこども園　５歳児

1　実践事例解説

これからの時代を生きる子どもの育ちと学びをつなぐ保育・教育
～架け橋期のカリキュラムについて考える～

國學院大學人間開発学部子ども支援学科
准教授　吉永　安里

これからの時代に求められる保育・教育とは一体どのようなものなのでしょうか。

それは、すべての子どもたちが、「今」自分のしたいことを実現し、充実した日々を送ること、そして、大人になったとき、VUCA 時代と呼ばれる不確実性の高い予測不能な時代においても、ウェルビーイング（well-being）を実現することのできる力を培うことだと言われています。ウェルビーイングとは、収入のような物質的な豊かさを超えて、自身の権利が保障され、自己実現することですが、これを実現できる大人になるためには、これからの時代を生き抜く力を乳幼児期から大人になるまで一貫して育んでいく必要があります。それは将来のために子ども時代を犠牲にするという準備教育的なことではなく、しかし今だけよければよいという近視眼的な見方でもありません。乳児期には乳児期の、幼児期には幼児期の、そして就学期には就学期なりのあり方を大切にし、その時その時子どもが自己実現をしていくプロセスと将来への見通しをもった保育や教育の営みの中で育まれるものです。

そして、そのプロセスの中で育まれる力こそが、平成 29 年改訂（改定）の乳幼児期の 3 つの指針・要領、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領、平成 30 年改訂の高等学校学習指導要領に示される 3 つの資質・能力です。「知識及び技能（の基礎）」「思考力、判断力、表現力等（の基礎）」「学びに向かう力、人間性等」（括弧内は乳幼児期）の 3 つの資質・能力は乳幼児期から高等学校卒業まで一貫して育むことが求められています。この 3 つの資質・能力は、不確実な時代の中で次々突きつけられる社会的課題、たとえば SDG s のような世界規模で取り組まねばならない諸問題を解決するために必要不可欠だからです。主体的に知識・技能を更新し、思考力・判断力を働かせて、高い表現力で他者と対話を重ね、探究する力が求められているのです。

こうした社会的背景から、今、幼児教育と小学校教育という、これまで歴史的にその内容や方法が大きく異なることが指摘されてきた学校段階等間を、主体的・対話的で深い学びを通して資質・能力を培うカリキュラムによってつなぐ取組が全国の自治体、学校・園で行われています。これが架け橋期のカリキュラムです。

茨城県では、令和 5 年度、幼稚園・保育所・認定こども園そして小学校の教員が一堂に会し、主体的・対話的で深い学びを通して培われる資質・能力とはどのようなものなのか、それを幼児教育から小学校教育につなぐためにはどうしたらよいのか、侃々諤々議論を交わし、

本事例集を練り上げました。特に、幼児教育と小学校教育を資質・能力でつなぐために重要な「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について何度も吟味しました。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、イコール子どもの資質・能力ではありません。幼児期、そして小学校低学年くらいまでの子どもたちが資質・能力を自己発揮するには、保育者や教師、友達といった周りの人たちの援助、保育者や教師の意図的な環境設定が重要です。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、こうした人的な援助、教育的な環境構成の工夫に支えられて発揮される子どもの姿なのです。

本事例集では、単に資質・能力を発揮する子どもの姿を示すだけではなく、その姿が見られる背景にあるたくさんの保育者・教師の指導の工夫が分かりやすく示されています。本事例集に詰め込まれた保育者と教師の真摯な取り組みが、茨城県に留まらず、多くの学校・園の実践に生かされることを願っています。

令和６年３月吉日

2　実践事例一覧

実施園・校	年齢 実施時期	実　践　事　例
保育所	５歳児 ８月	「くれよんのくろくんでうちわづくり」 ―主に「思考力の芽生え」、「豊かな感性と表現」―
保育所	５歳児 ９月・10 月	「ぼく１位になりたい」 ―主に「健康な心と体」、「思考力の芽生え」―
認定こども園	５歳児 ５月～７月	「お店屋さんごっこ～夏まつりへ」 ―主に「協同性」、「言葉による伝え合い」―
認定こども園	５歳児 ８月	「実験！浮くもの・沈むもの」 ―主に「思考力の芽生え」、「協同性」―
幼稚園	５歳児 ７月	「おばけやしきを作ろう」 ―主に「言葉による伝え合い」、「協同性」―
幼稚園	５歳児 ６月～１月	「かるたを作ろう」 ―主に「思考力の芽生え」、「数量・図形・文字等への関心・感覚」―
小学校	１年生 ９月	「いきものとなかよし（生活科）」 ―主に「自然との関わり・生命尊重」、「思考力の芽生え」―
小学校	１年生 ９月	「いきものとなかよし（生活科）」 ―主に「自然との関わり・生命尊重」、「協同性」―

3　実践事例

保育所５歳児　８月

「『くれよんのくろくん』で うちわづくり」

主に
「 思考力の芽生え」、
「豊かな感性と表現」

1　活動の概略

①　夕方の合同保育で「くれよんのくろくん」の絵本の読み聞かせがあった。クレヨンのスクラッチに興味をもったA児が翌日クラスの友達と話をし、やってみたいと保育士に伝えてきた。

②　クラス全体でスクラッチを体験する。夢中で取り組む子ども達の姿が見られた。

③　スクラッチした作品でうちわ作りをする。

④　絵本のページを開き、「同じだね！」と確認する姿があった。

2　保育者の願い

★　子どもたちの「やってみたい」という思いをクラス全体で共有させたい。

★　友達と一緒に行うことで、自分の作品と友達の作品を見比べて違いや同じところを見つける楽しさを味わってほしい。

★　絵本から製作活動に繋がっていくことで、さらにその絵本に興味をもってほしい。

3　「架け橋タイム」で得られたこと

★　実施時期　　10月

★　場　　所　　小学校

★　参 加 者　　小学校　１年担任、保育所　主任保育士

★　内　　容

・保育所での取組が、小学校でどう活かされていくか話し合った。今回の取組は１年生の図工で自由に絵を描くという活動につながっていく。

・保育所での遊びこむ経験が、小学校で興味をもったことに集中して取り組むことにつながっていく。

・１年生のスタートカリキュラムのねらいには、楽しく過ごす、遊びを楽しむ、といった内容が組み込まれている。保育所での生活から小学校での学習という流れに無理なくつながるように配慮している。

4　子どもの活動と願い・問い

①　「くれよんのくろくん」の絵本を、集中して見ていた。
　スクラッチのやり方を知り、やってみたいという声が上がった。

「花火きれいだね。どうやってかいたのかな」
「おもしろそう。やってみたいね」
「明日みんなに言ってみようよ」

②　画用紙にクレヨンで自分の好きな色を塗っていった。
　力を入れて塗る必要があったが、「大変」と言いながらも根気よく取り組んでいた。

「いっぱい染めるの大変だね」
「ピンクの隣が紫で同じだね」

③　下地を塗り終えた子どもは、その上に黒色のクレヨンを塗り始めた。その様子を見て、自分も頑張ろうとする姿があった。

「見て、手が真っ黒になったよ。もうすぐできるよ」
「もうできるの？私も頑張る」

④　黒いクレヨンの上に割りばしで自分の好きな絵を描いた。様々な色が表れてきて、子どもたちから歓声が上がった。
　活動時間が長くなったにもかかわらず、最後まで集中して取り組んでいた。

「割りばしで描いたら、きれいな色が出てきたよ！」
「お家でも描きたいな」

＜ねらい＞
・合同保育であることを考慮し、３歳児から５歳児までが一緒に楽しめる内容の絵本で、読み聞かせを楽しむ。

・絵本のストーリーだけでなく、絵の美しさなども味わう。

＜環境構成の配慮＞
・子ども同士で会話しながら活動できるよう、グループでの活動にした。

・絵本の世界と夏を意識した制作活動が繋がるように、画用紙をうちわの形にした。

＜保育者の援助＞
・十分にスクラッチが楽しめるように余裕をもって時間を設定した。

・うちわを使う場面がイメージできるような言葉掛けを行って、夏の夜の楽しさのイメージが膨らむよう工夫した。

・たくさんの色を使って絵を描くことが難しい子どもには、保育者が枠を示して枠内を塗るように援助した。

・ふだんは集中が続かない子どもも集中できていたので、取り組んでいる姿を見守った。よさを認め、完成を一緒に喜んだ。

＜関連する育ちや学び＞
・言葉による伝え合い

5　振り返りと改善したこと

○　絵本の花火の場面から夏の夜の楽しさをイメージでき、楽しくうちわづくりができた。

○　絵本の読み聞かせから子どもたちの「やってみたい」という声を拾い、制作活動に発展することができた。保育者は子どもたちの声に耳を傾け、活動の始まりを見逃さないで働きかけることが大切だと感じた。

○　「早く終わらせたい」という思いから、制作が雑になってしまう子どもたちもいるクラスではあったが、今回はみんな集中してじっくり取り組み、作品を仕上げることができた。自分たちで興味をもった活動に全員が集中して取り組んでいた。

6　その後の子どもたちの姿

○　スクラッチがとても楽しかったのか、自由遊びの時に繰り返しスクラッチ画を行う子どもがいた。

○　「くれよんのくろくん」の絵本が子どもたちの間で大人気になり、何度も借りて保護者に読んでもらったり、保育者に読み聞かせリクエストしたりする子どもがいた。読書への関心が高まった。

○　長時間の活動をやり遂げたことで、子どもたちの自信につながった。また、「やってみたい」という気持ちを保育士に伝えてくることが今までよりも増えてきた。

○　室内での活動だけでなく、戸外での活動でも、気になったことや興味をもったことを子どもたちから保育者に質問することが増え、活動の幅も広がった。

「おうちでも絵本読んでもらったんだよ」

保育所　5歳児　９・１０月

「ぼく１位になりたい」

主に
「健康な心と体」、
「思考力の芽生え」

1　活動の概略

①　日頃から運動することが好きな子どもは多かったが、副園長と戸外で一緒にボール遊びをしていた時、子どもたちから「サッカーが上手になりたい、教えて」という声が上がった。
②　サッカーへの興味をきっかけに、さらにいろいろな動きを楽しんでほしいと考え、副園長と相談して運動遊びの時間を設けた。
③　運動遊びでは、５歳児と４歳児が一緒に楽しむ姿がよく見られた。５歳児は年間を通してリレー遊びを楽しむことが多かったが、次第に競争心が芽生え、チームが１位になるにはどうすればいいか、少しずつ考え始めた。
④　リレー遊びでの子どもたちの活動は、運動会のリレーにつながっていった。

2　保育者の願い

★　「どうしたら１位になれるのか」「速く走れるようになるにはどうすればいいのか」「バトンタッチを上手くするのにはどうするか」等、自分で考えたり友達の意見を聞いたりして、運動遊びを楽しみ、心も身体も元気になってほしい。
★　子どもたちにとって運動遊びはワクワクドキドキするものである。何事にも挑戦をすることで、さらに自分を発見できるようにしたい。
★　様々な運動遊びが、「人との出会いの場のきっかけ」となっていけるようにしたい。

3　「架け橋タイム」で得られたこと

★　実施時期　　8月　・　11月
★　場　　所　　保育所　・　近隣小学校
★　参 加 者　　小学校教諭3名・保育所副所長、主任保育士、年長児担任
★　内　　容
・10の姿について話し合ったところ、「興味をもったこと、感じたことなどを表すことができる」、「失敗を恐れず挑戦する意欲」、「ケンカをしても相手の立場を理解して自分たちで和解できる」、「生活習慣を整える」等を大切にしたいという意見が出された。
・保育所では運動遊びを通して子どもたちの「やってみたい」という意欲が高まってきたことや、友達と話し合う時間を設けたことで、相手の気持ちになって考えられるようになり、トラブルになっても自分たちで解決策を考えられるように育ってきていることを伝えた。
・近隣小学校との「架け橋タイム」は初めてだったが、保育所での遊びが、小学校での学びにつながっていくことを感じることができた。
・日常の遊びの中に学びの芽はたくさんあり、保育者の支援によって伸ばすことができることを感じた。運動遊びからゲームに発展することで、子どもたちは勝ち負けの経験をし、勝つために考える思考力につながる。また、課題に対して自分の意見を述べたり相手の意見を聞いたりして話し合う関係ができる。さらに、ゲームを通してルールを守ることの大切さに気付くことができた。

4　子どもの活動と願い・問い

「〇〇ちゃん、早く早く！」
「バトン！バトン！」

「腕をいっぱいふれば速くなるんじゃない？」
「足を上げるのは？」
「バトンを渡す時、友達の名前を呼ぶ！」

「〇〇ちゃん、抜かせ」
「〇〇ちゃん、こっちだよ！」

「〇〇ちゃん、最後までがんばれ！」

①　「リレーがしたい」と声が上がり、みんなで広場に行った。子どもたちは4グループに分かれ、リレー遊びで走ることに集中していた。「もう１回、もう1回」と、夢中で活動していた。

②　最下位になったグループのA児が悔しそうに泣き出し、保育者に、「ぼく１位になりたい。どうしたら１位になれるの？」と問いかけた。保育者はA児のグループの子どもたちに声をかけて話合いを援助した。

　A児たちの取組は、次第に全てのグループに広がっていき、話し合う場面が増えていった。

③　リレー遊びは真剣なリレー練習に展開し、各グループが競い合って運動会に向かっていった。

　話合いを通して、子どもたちは、友達を応援するようになった。また、バトンを受け取る時、前の走者の名前を呼ぶ子どもが増え、雰囲気が盛り上がった。

④運動会当日、初めのリレー遊びの時に悔し泣きをしていたA児は、走ってくる友達を大きな声で応援していた。友達と気持ちを一つにし、共にがんばってきた思いを感じた。

＜ねらい＞
・身体を動かす楽しさを実感し、充実感や満足感を得ることで、情緒の安定につなげる。
・どうしたらできるのか、上達するのかを考える経験をすることで、思考力を育てる。
・取組を認めてもらう経験を通して、自己肯定感と挑戦意欲を育てる。
・ゲームにはルールがあることを理解するとともに、友達と喜びを分かち合う楽しさを感じる経験を通して、協力する大切さを感じられるようにする。

＜環境構成の配慮＞
・勝つためにはどうすればいいのか、グループ毎に話し合う場面を、タイミングよく設けるようにした。

＜保育者の援助＞
・保育者も子どもたちと共に遊びを楽しみ、楽しさを伝えるようにした。
・子ども一人一人の様子を観察しながら、子どもたちの気持ちを汲み取り、個に応じて寄り添い、前向きになれるような言葉掛けをした。
・活動終了時には、子どもたちの感想を聞き、振り返りができるよう援助した。

＜関連する育ちや学び＞
・言葉による伝え合い
・協同性

5　振り返りと改善したこと

○　３歳頃からリレー遊びに興味を示していたが、５歳になるとただ走るだけではなく、勝つことを意識し始めた。５歳児全員で行ったリレー遊びで最下位になったＡ児の悔し泣きから、運動会に向けての子どもたちの気持ちに変化が見られてきた。「どうすれば出来るか」、「速く走れるか」を考え、練習し、成績が向上することが達成感につながった。

○　多くの子どもたちが、「チームで１位になりたい」という思いをもつようになったことから、保育者は話し合う機会を設けた。それにより、子どもたちの多くは、自分の意見を言えるようになった。

○　友達に「こうやると出来るよ」と話しかけるなど、共に学び合うことが出来た。

○　走っている途中、友達を応援したり声を掛けたりする様子が見られた。自分のことだけではなく、友達のことも考えられるようになり、協力することの大切さに気付くことができた。

○　リレーへの取組は運動会の他の競技にも広がった。他の種目でも、上手に出来ている友達の動きを真似しながら取り組んでいた。

○　すぐに諦めてしまう子どもや興味を示さない子どももいたため、保育者は、その子どもの気持ちに共感し、自分がやりたいことから始めていくよう助言した。すぐには興味がもてず活動に参加しない子どももいたが、保育者が見守っているうちに、子ども同士で誘い合い、活動の輪に入っていく姿が見られた。友達との関わりを増やすことの大切さを再確認した。

6　その後の子どもたちの姿

○　子どもたちが自分の「やってみたい」という気持ちから活動を発展させることが多くなり、その度に自分で考え工夫しようとする姿が育っているように感じられる。

○　一つの目標に対して、子ども同士で意見を出し合える環境を援助することにより、他の運動遊びでも「～すればいいんじゃない？」という言葉を投げかける子どもが多くなった。自分の意見を聞いてもらえることが自信につながっている一方、他人の話を聞く姿勢も身に付いてきている。

○　自分だけ楽しむのでなく、友達と協力する楽しさや達成感を経験し、運動遊びの幅も広がり、様々なゲーム遊びを好むようになってきた。

（仲間集めゲームの場面で）

「私たちこれで5人だから、○○ちゃんの所に入ればいいよ」
「わかった！」

認定こども園　5歳児　5～7月
「お店屋さんごっこ～夏まつりへ」

主に「協同性」、「言葉による伝え合い」

1　活動の概略

①　休日の経験をもとに、身近な材料を使ってジュースを作る園児がいた。他の園児たちも興味をもち、ジュースやアイスの製作を始め、お店屋さんごっこが始まった。
②　他のクラスの園児も招待して、お店屋さんごっこを展開したが、園児から「本当のお店屋さんって、どんなふうに物が並んでるんだろうね？」、「行ってみたいね」という言葉が出たことから、地域のお店に探検に行き、買い物体験をすることになった。
③　体験後、「園の夏まつりで何を売るか」、「何を材料にしてどう作るか」など、みんなでイメージを出し合い、試行錯誤しながら決定した。品物は異年齢児合同で作ることになり、5歳児が年下の園児に教えながら製作が始まった。
④　夏まつり当日は、5歳児が店員になり、自信をもって他のクラスの園児たちと一緒に楽しんだ。

2　保育者の願い

★　自分の思いや考えをしっかりと友達に伝え、友達の意見も受け入ながら、共通の目的に向かって取り組み、満足感や達成感を味わうことができるようにする。
★　夏まつりの品物製作では、今までの経験を活かし、様々な材料を使って工夫しながら作る楽しさを味わえるようにする。

3　「架け橋タイム」で得られたこと

★　実施時期　7月、12月
★　場　　所　小学校
★　参 加 者　小学校：教務主任
　　こども園：主任保育教諭、５歳児担任
　　市教育委員会：指導主事

★　内　　容
＜園の活動で育った姿から小学校の学びへのつながり＞
・小学校では、園での栽培活動やお店屋さんごっこ等の経験を生かして、１年生はアサガオ、２年生は野菜作りを意欲的に行っている。また、道の駅で花の寄せ植えの販売を行っている。
・生活科や図画工作において、園での経験や体験をもとにアイデアを出し合い、試行錯誤している様子がある。
・園では難しかったことも、経験を重ねることで、入学後、発達段階に応じてできるようになっている。園での活動や経験が土台になる。たくさんチャレンジし体験することが大切だ。
・園児・児童の意見を尊重し、話し合うことができる環境を設定することで、様々な「やってみたい」、「こうしたらどう？」等のチャレンジが生まれ、主体的な学び（遊び）へつながっていく。
・小学校との交流（学校探検、授業体験、在校生と一緒に遊ぶことなど）を行うことによって、園児が期待をもって入学できている。特に配慮を要する園児にとっては安心感につながり、戸惑うことが少なくなり、有効である。
・小学校の教職員と園の職員で情報交換を行い、共有することで、指導内容の一体化と学びの継続性を図ることができる。

4　園児の活動と願い・問い

「いらっしゃいませ。何にしますか」
「○円です。チケット１枚ください。ありがとうございました」

「同じものを集めて並べてあるね」
「きれいに並べてあるね」

「たこ焼きのノリを作るよ。始めに細く切って、次は細かく切ってね」
「たくさん切ってね」

「どれにしますか？こっちがおいしいですよ」
「これがおすすめです」

①　お店の名前を決め、看板やチケット等を作ってお店屋さんごっこが始まった。始めは声を掛けるのを恥ずかしがった園児も、お客さんに聞かれると、品物の説明をしながらたくさん売っていた。

②　地域のお店に行き、品物の並べ方を見たり、買い物の仕方を体験したりした。
　お店の方の説明を真剣に聞き、質問する園児がいた。
　買い物体験では、緊張しながらも、品物を選んでレジで支払うことができた。

③　夏まつりのお店屋さんで売る品物の製作をした。たこ焼き、アイス、金魚すくい等、いろいろな材料を使っていた。
　始めは自分の製作に夢中だった園児が、次第に年下の園児に作り方を教えたり、手伝ったりするようになった。

④　夏まつり前日には、売り手、買い手に分かれて練習をした。
　当日は、練習の成果か、大きな声でお客さんを呼び込んだり、順番を待ってもらうように声を掛けたりしながら、お店屋さんになりきっていた。みんなで楽しむことができていた。

＜ねらい＞
・自分の思いや考えを伝えたり、友達の意見を聞いたりしながら、イメージを共有する楽しさを味わう。
・身近な材料を使い、試したり工夫したりして作って遊ぶ。
・それぞれの経験を生かしてイメージを膨らませ、友達と話し合いながら活動する充実感や満足感を味わう。

＜環境構成の配慮＞
・お店屋さんのイメージが膨らむように、お店の探検と買い物体験の機会を設けた。
・園児たちが意見を出し合いながら、様々な材料を使って自由に作ることができるコーナーを設定した。
・異年齢児も一緒に取り組むことができるように、活動の時間調整をした。

＜保育者の援助＞
・活動中に園児たちの作品を紹介しながら、一人一人の思いや考えを受容し、広げ、みんなが自由に意見が言えるように援助した。
・買い物体験を振り返る活動では、保育者も園児と一緒に遊びに参加し、意見が言いやすいような雰囲気をつくった。
・園児たちの、「品物が本物に見えるようにするにはどうしたらいいか？」という疑問には、ヒントやアイデアを出したり様々な材料を提供したりした。

＜関連する育ちや学び＞
・社会生活との関わり
・数量・図形、文字等への関心・感覚

5　振り返りと改善したこと

○　お店屋さんごっこや買い物体験を通して、作るだけでなく売ることへの意識付けをしながら進めたことで、夏まつりでは園児一人一人が自分の役割をしっかりと意識しながら活動できた。

○　異年齢児合同で品物製作に取り組んだことから、5歳児が年下の園児へ優しい言葉掛けをしたり手伝ったりする姿が見られ、自信を深めていた。

○　好きな遊びから発展し、お店屋さんごっこから夏まつりへと遊びがつながった。遊びの中で話し合い、協力しながら進めたことにより、達成感や充実感を味わうことができた。遊びは、園児の心身の成長を促す上でとても重要なものであると感じた。

○　5歳児クラスが少人数のため、お店屋さんごっこが展開していくことが難しかったことから、異年齢児合同の活動を多く取り入れながら進めた。今後も、保育者間で連携しながら、異年齢児合同の活動を多く取り入れ、園児たちが思いを共有し、楽しく遊び込めるような環境設定を工夫したい。

○　品物をどの材料でどんなふうに作るかを話し合う際には、近年のコロナ禍で園や地域の様々な行事を経験していなかったためか、園児たちの想像力が膨らまず、意見があまり出ない場面があった。園や地域の行事の写真や映像を見せたり、これまでに使った材料を園児たちの手の届くところに置いて自由に使えるようにしたりして、アイデアが出しやすい環境にしておくとよかったと思う。

6　その後の園児たちの姿

○　夏まつりが終わった後も、異年齢児でお店屋さんごっこを継続して遊ぶ姿が見られた。3歳児が売り手になって大きな声で「いらっしゃいませ」と声をかけ、１・２歳児が買い手になり品物を選びながら簡単なやりとりをして、遊びながら楽しく交流していた。異年齢児合同で活動をした後、戸外の砂場で一緒に泥遊びや水遊びをして遊ぶ姿も見られ、園児同士の関わりが増えた。

○　5歳児は、夏まつりでリーダーシップを発揮しながら行事に取り組んだことが自信につながったのか、その後、園で育てたキュウリやナス、トマト、オクラなどの野菜を収穫し、袋に詰めて、八百屋さんごっこへ発展させた。各クラスへ行き、大きな声で呼びかけながら楽しんでいた。

○　夏まつりの後、４歳児はお寿司屋さんごっこを始め、他のクラスの園児と一緒に買ったり、食べたりしていた。５歳児のまねをして遊びを考え、楽しむ姿が見られた。

○　品物製作や売り買いごっこ、看板製作などを通して、文字や数、大きさ、形などにも興味をもち、収穫した野菜の数や重さを量って表にしたり、野菜の成長を楽しみに観察し絵を描いたりしていた。

○　その後の園の行事でも、5歳児は中心となって取り組んでいる。9月の運動会でも、一人一人が自分の役割に積極的に、自信をもって取り組む姿がみられた。保護者や友達、保育者等たくさんの人に褒められ、認められたことで、達成感や満足感を味わい、さらに大きな成長が感じられた。

（５歳児の八百屋さんごっこから）
「こども園のおいしいナスが採れました！」
「どれがいいですか？」
「こっちの方が大きいですよ」
「１個ずつ買えますよ」

認定こども園　５歳児　８月
「実験！浮くもの・沈むもの」

主に
「思考力の芽生え」、
「協同性」

1　活動の概略

①　夏のプール遊びの中で使われるおもちゃには、水に浮くものと沈むものがあることに気付いた園児がいた。「どうして沈むんだろう？」という素朴な疑問が生まれた。
②　園児たちが日頃楽しんでいるワークブックの中に、浮くもの・沈むものをテーマにしたシール遊びのページがあった。園児たちは、シールの絵を見ながら、まずは頭の中だけで浮くものと沈むものを考えた。
③　考えたことの答え合わせを、実際に水の中で行うことになった。園児たちは思い思いの物を持ってプールへ向かった。実験の結果に納得したりびっくりしたり、園児たちの反応は様々だった。
④　実験でわかった浮くものだけを組み合わせ、いかだ作りが始まった。ペットボトルや牛乳パックをいくつもつなぎ合わせ、人が乗れる大きさのいかだが完成した。

2　保育者の願い

★　園児の疑問に対して、保育者が答えを知らせることは容易なことだが、活動の中で「調べること・試してみること」を意欲的に楽しみ、自分の考えで答えを導き出せる喜びを十分味わってほしい。
★　友達の考えや思いに耳を傾け、人それぞれ色々な考えがあることに気付いてほしい。友達がなぜそう思ったのかを知ることで、様々な角度から考えることの大切さに気付いてほしい。

3　「架け橋タイム」で得られたこと

★　実施時期　　８月
★　場　　所　　小学校
★　参 加 者　　小学校：１学年主任、１学年担任２名、特別支援学級担任１名
　　こども園：主幹保育教諭、年長組担任２名
★　内　　容
・幼児期の、日頃の何気ない遊びの中での経験が、様々な発見や学びにつながるということを再確認した。
・「様々な経験 → 新たな発見 → 発見できた喜び → 発見したことを自分の言葉で伝える（伝えたい！聞いてほしいという願い）→ 聞いてもらえた喜び → 自信をもつ→次の活動に対する意欲」というサイクルが園児を成長させることが確認できた。
・一つのことをみんなで考えることにより、人それぞれ様々な考えや意見があることに気付き、友達の意見に耳を傾け、受け入れようとする姿が見られる。
・試行錯誤が次の課題を生み、「考えてみよう→調べてみよう→またやってみたい・手をあげて発表してみよう」という思いに発展する。保育者や教師が、園児・児童に答えや結果を伝えるのではなく、園児・児童の意欲を引き立て、考えたことを生かせるように援助していくことが大切だ。

4　園児の活動と願い・問い

「軽そうだから浮くよ」
「重いから沈むよ」
「硬いものは重いかも」
「やってみないとわからないね」

① 始めはシールの絵を見て「浮くと思った物」、「沈むと思った物」を分けていた。みんな真剣に考え、友達と相談する園児、最後まで一人で考える園児など、様々な姿が見られた。

例　トマト・ボール・新聞紙・石・キュウリ・スポンジなど

「やっぱりね」
「えっなんで？さっきまでは浮いてたのに？」
「ちょっと待って、少し浮いてきたよ」
「ペットボトルには水を入れてみよう」

② 実際にプールで水に浮かべて実験した。考えたとおりの結果に納得する園児、意外な結果に驚きの声を上げる園児、不思議に思ってもう一度実験する園児、時間が経てば結果が変わることを期待してじっと観察している園児など様々だった。

「水が少ないと浮かばないのかな？」
「他のも調べてみたい」
「お風呂でやってみよう」
「家で実験したら、みんなに教えてあげるね！」

③ 結果を話し合った。
- 浮いたのは、空気をいっぱい含んでいるから、軽いから。沈んだのは、重いから、空気が入っていないから。
- トマトは赤は浮いて青は沈んだ。色のせい？、赤くなると軽くなる？、種の入り方のせい？
- 水がしみこむと新聞紙は沈むのに、スポンジは浮かんでるぞ！
- 小さな入れ物では浮かばなかったのに、プールでは浮かんだ！水が少ないと浮かばないのかな？

＜ねらい＞
- 新しい発見や考えることを楽しむ。
- 友達の気付きや思いを聞き、色々な考えがあることに気付く。
- 新たな発見を喜び、次の活動のきっかけや意欲につなげる。

＜環境構成の配慮＞
- 園児たちの知識を増やし思考力を高めるために、日頃から図鑑や道具等を園児たちの目の届く所に置き、いつでも取り出せるようにしておいた。

＜保育者の援助＞
- 園児たちの「何故？知りたい」というつぶやきをできるだけ多く聞き取り、話合いや実際に試してみることが容易にできる環境を整えた。
- 園児たちの意見や、興味や関心に合わせ、様々な実験ができるよう、多くの材料を用意しておいた。
- 園児たちが、今興味をもっていることは何か、注意深くくみ取り、活動や遊びの中にとり入れやすい道具や教材を用意した。

「浮くものだけならいかだができるかな？」
「ガムテープのかたまりは沈むけど、貼っても平気かな？」
「重くなったら沈むかな？」

④　「浮くものだけ集めたら面白いおもちゃが作れそう！」園児の発想から、いかだ作りが始まった。実験の経験をふまえ、材料や形をみんなで試行錯誤した。「いざ進水！」見事に浮かんだいかだに園児たちは大興奮。順番にいかだに乗り、満足そうだった。

＜関連する育ちや学び＞
・言葉による伝え合い
・自然との関わり

5　振り返りと改善したこと

○　この活動で、園児たちはわからないことや不思議に思ったことを、自らの手で実際に調べたり試したりして、答えを自ら導き出せることに喜びを感じていた。保育者が結果を教えたり伝えたりせず、「何故そうなったのか」というプロセスを園児と一緒に考えることが、園児たちの「心に残る印象的な学び」につながったと思う。
○　協同的な遊び・活動の中で、園児たちに、自分の考えに自信をもって伝えようとする姿や、友達の考えに耳を傾けようとする姿が見られた。以前は、自分の考えと合わない時など、受け入れられずに相手に否定的な発言をしてしまうこともあったが、今回の活動では、「そうだね」、「なるほど！」などと友達に共感する言葉を自然に発するようになり、それぞれの園児に成長が感じられた。
○　自分の思いを人前で話すことになかなか自信がもてなかった園児も、疑問に対して自分で結果を確認できたことで、自信をもって発言することができるようになった。

6　その後の園児たちの姿

○　野菜や果物、おもちゃや道具など、身の回りにある物の形状や重さに興味や関心を示し、比べ合うなどしながら、遊びの中で楽しみながら学び、気付く姿が見られている。
○　友達と話し合いながら活動を進めることが上手になってきた。思っていることを言葉で伝えることが得意でない園児や、友達の意見を素直に受け入れられない園児もまだいるが、周りの友達のサポートを受けたり、自分と異なる意見を聞いて新たな発見をしたりする経験を通して、友達と話し合うよさに気付けるようになってきた。
○　製作の場面で、友達と同じように作りたいと思った時に、友達の真似をするだけでなく、「すごい」「どうやって作ったの」などとコミュニケーションを図りながら、友達のよさを認め、自分にとり入れることができるようになってきた。

「これ、誰が作ったの？すごいね」
「頑張るぞ！」
「オー！」

幼稚園　５歳児　７月

「おばけやしきを作ろう！」

主に
「言葉による
伝え合い」
「協同性」

1　活動の概略

①　毎年、夏まつりでは５歳児が中心になり、お店屋さんを行い、３歳児や４歳児を招待していた。
　夏まつりについて話し合ったところ、「おばけやしきを作りたい」という意見が出た。みんなで「どんなおばけやしきにしたいか」イメージを伝え合った。
②　自分たちでイメージした「おばけやしき」の実現のために、作る場所を決め、意欲的に活動を始めた。
③　イメージを実現するために、順路や準備する物について、友達と意見を出し合いながら試行錯誤を繰り返した。
④　夏まつり当日、友達と協力して作ったおばけやしきを発表できた。

2　教師の願い

★　自分の考えや思いを言葉で伝え合う中で、相手にわかるように話したり、相手の考えの良いところに気付いたりしながら、友達と一緒に活動する楽しさを感じてほしい。
★　友達と共通の目標に向かって力を合わせて活動する達成感を味わってほしい。

3　「架け橋タイム」で得られたこと

★　実施時期　　７月
★　場　　所　　小学校
★　参 加 者　　小学校：1年生担任、特別支援学級担任
　　幼稚園：教頭、5歳児担任
　　保育所：5歳児担任
★　内　　容

○4月からの子どもたちの姿について
・幼稚園･･･遊びの振り返り等で、自分の思いを言葉で伝える経験ができるようにしている。
・保育所･･･自分たちで考えて行動できるように援助している。
　　園の決まりなどを話し合うことを大切にしている。
・小学校･･･集団意識を高め、友達関係を少しずつ構築している。
○「期待する子ども像」と、それに向けた教師の関わり
・幼稚園･･･「言葉による伝え合い」が楽しめるような、発達段階を意識した指導
・保育所･･･思いやりの心の育成と、挨拶や身支度などに自分から取り組めるような援助
・小学校･･･相手意識をもって友達と関わることができるような指導
○架け橋タイムで得られたこと
・幼稚園・保育所･･･就学後の幼児の困り感を知ることができた。自分で考えて行動すること、友達と協力して活動に取り組む経験が、就学後の幼児の姿につながることがわかった。
・小学校･･･各園での取り組みを知ることができた。就学前の幼児の育ちを就学後にもつなげることを、今後も意識し、連携を深めたい。

4　幼児の活動と願い・問い

①　おばけやしきのイメージと自分がやってみたいことを話し合った。意欲的な話合いになり、様々な意見が出た。
　自分のイメージを絵に描く幼児もいた。

「こんなおばけが怖いと思う」
「迷路みたいにしたい」
「お部屋をおばけやしきにしたら、給食はどこで食べるの？」

②　おばけやしきを実現するために、空き教室を使うアイディアが出た。幼児たちで話し合い、クラス全員で園長先生にお願いし、教室を借りることができた。

「園長先生、空いてるお部屋を貸してください」
「夏まつりでおばけやしきを作りたいから」
（小声で）「みんなには内緒だよ」

③　おばけやしきで使うおばけや道具作りが始まった。幼児一人一人が自分のイメージを元に製作した。「でこぼこ道」は友達同士で工夫し、協力しながら製作した。３歳児を気遣う発言があった。

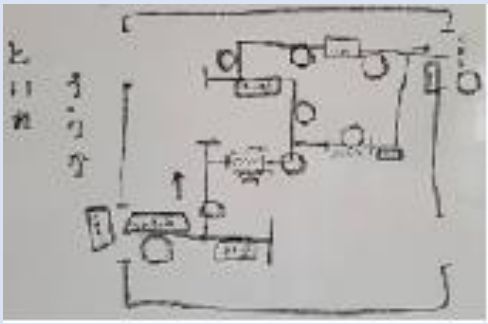
「ここを行き止まりにしてみたい」
「でこぼこ道は新聞紙を丸めたら作れるかな？」
「１枚じゃ小さいから２枚重ねたら？」
「広がっちゃうからテープでとめよう」
「もっとこっちまで（でこぼこ道を）のばそう」
「（おばけは）こんな声はどうかな？」
「こんなふうに手を動かしたら、怖いかな？」
「3歳児さんには怖すぎるよ。少しやさしくしよう」

④　夏まつり当日、自分たちで作ったおばけやしきを他のクラスの幼児や教師に発表した。
　おばけやしきに３歳児が入る時には、声をかけ、やさしく接しようとする姿が見られた。

＜ねらい＞
・友達とイメージを共有し、共通の目標に向かって力を合わせ、達成感を味わう。
・自分が考えたことや感じたことを言葉で伝え合う楽しさを味わう。

＜環境構成の配慮＞
・話し合う時には、互いの顔が見えるように円形になって座るようにし、幼児が安心して話ができるよう十分な時間を確保した。
・おばけやしきのイメージを共有するために、ホワイトボードや「おばけやしきの設計図」を作成して可視化した。

＜おばけやしきの設計図＞



・幼児がイメージしたおばけやしき作りが、継続的でダイナミックに展開できるように、園の空き教室を活用した。
・幼児がイメージしたおばけやしきが実現できるように、様々な材料を提示し、支援した。

＜教師の援助＞
・一人一人の意見を否定せず「それ、おもしろそうだね」と興味をもって聞くことで、幼児が安心して考えを言えるようにした。
・言葉ではイメージが伝えにくい時には、幼児が描いた絵を用いるなど、幼児同士がイメージを共有できるようにした。
・年少組や年中組を招待することを伝え、「みんなが楽しめるようにするためには、どのようにしたらいいか」を話し合う時間を設けた。

「みんな怖がってるね」
「園長先生ありがとう」
「３歳児さんたちが来るから優しくしよう」

＜関連する育ちや学び＞
・思考力
・豊かな感性と表現
・数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

5　振り返りと改善したこと

○　みんなの前で自分の考えを発表することが苦手な幼児もいるため、教師は一日の遊びを振り返ったり、クラスで話し合ったりする活動を継続してきた。また、幼児のどんな意見でも否定せずに受け止め、安心して考えを言える雰囲気づくりに努めてきた。それらの取組が今回のおばけやしき作りの話合いで幼児が活発に意見を出し合うことにつながったと感じる。

○　言葉だけではイメージしていることが伝わりにくいと感じたので、絵を用いてイメージを伝えるようにした。それにより、幼児同士でイメージが共有できた。また、「おばけやしきの設計図」を教室に掲示したことで、さらにイメージが広がった。

○　幼児の「（迷路のような）おばけやしきを作ってみたいけれど、自分たちの教室では狭くてできない」という言葉を聞いて、「園長先生に相談してみたら？」と提案してみると、自分たちで交渉に向かった。「できない」と諦めず、自分たちのやりたいことの実現に向けた解決策を幼児なりに考え、学ぶことができたと感じる。

○　おばけやしきの製作途中、教室の床にテープを貼って幼児に歩かせるなどして、できあがるおばけやしきの広さや、迷路の感覚を具体的に体感する機会を設けた。それにより幼児が実際のおばけやしきのイメージをもつことができた。

○　自分たちの思いだけではなく、「3歳さんには怖すぎる」という発言から、相手意識や思いやりの気持ちが芽生えてきていると感じた。

6　その後の幼児たちの姿

○　おばけやしきを完成させ、夏まつりで他のクラスの幼児や教師が楽しんでくれた経験から「お家の人にも楽しんでもらいたい」という気持ちが高まった。その後、保育参観後に来てくれた保護者をおばけやしきに招待し、楽しんでもらったことで、さらに達成感や満足感を味わっていた。

○　自分の考えたことを発表したり、友達の考えに耳を傾けたりして共通の目標に向かって試行錯誤する経験を通して、友達と一緒に作り上げる難しさや楽しさ、面白さを感じることができた経験は、その後の「お話作り」の活動や、発表会においての「オリジナル劇」の発表につながった。

＜おばけやしき看板作り＞

「おばけやしきの看板を作ろう！」
「『ば』の次は、なんだっけ？」
「『け』だよ。ぼく書けるよ」

＜お話作り～発表会へ＞

「いろいろな虫や動物が出てくる話にしてみたい」
「ホテルはどうかな？この間、お泊まりに行ったんだ」
「大きなお風呂に入るんだよ」
「どんな動物にする？」

幼稚園　５歳児　６月～１月
「かるたを作ろう」

主に「思考力の芽生え」、「数量・図形・文字等への関心・感覚」

1　活動の概略

①　本園では、帰りの会の「おはなしタイム」で、幼児と教師が自由に対話をしている。ある日、毎年行っている「正月遊び」の話題になり、幼児たちから「幼稚園かるたを作りたいなあ」という話が出た。周りの幼児たちも「作りたい」と言い出し、日常生活の中で自分の経験していることや幼稚園で経験したことをもとに、自分たちの言葉でかるたを作ることになった。

②　教師が「幼稚園と言えば何？」と問いかけると、幼児たちは「お地蔵様」、「園バス」、「祭り」「園長先生」、「運動会」、「遠足」など自分の思いついた言葉を次々と出し始めた。

③　五十音表を見ながら、②の話合いで出た言葉から連想した言葉や文章を出し合って、幼児たちの体験や思いをもとに、読み札を決めていった。

④　幼児たちは読み札に合わせて絵札を考え、下描きを描き、絵の具で着色していった。

2　教師の願い

★　かるた作りには、「自分の考えを表現する」、「他の幼児の考えを聞く」、「友達と折り合いをつける」、「日常生活に必要な言葉を理解する」、「試行錯誤し工夫する」、「表現する喜びを感じる」等の活動が含まれており、3つの資質・能力を育てることにつながる。「かるた作り」の経験をこれから先の学びにつなげてほしい。

★　「かるた作り」の活動を通して大きな達成感を味わい、自信を深め、これからの園生活の中の様々な活動に発展させてほしい。

3　「架け橋タイム」で得られたこと

★　実施時期　8月
★　場　　所　小学校
★　参 加 者　小学校：第１学年主任、第１学年担任
　　幼稚園：主任教諭、５歳児担任
★　内　　容
・市内の小学校へ入学する幼児は、複数の幼児教育施設から集まり、個人差や各施設での取組に違いがあるため、スタートラインを揃えるのが難しい。その中で、共通している「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにして、小学校でも継続して取り組むことで育ちと学びがより深まっていくと考える。
・今回の本園での取組で「文字への興味・関心」が深まったこと、「思考力の芽生え」「協同性」「仲間意識→集団活動での達成感」等で得られたことが、小学校生活でより深めることができる。
・今後も、小学校と本園の職員が、必要に応じて話合い(報告)の場を設け、その後の子どもたちの様子について意見交換をする。

4　子どもの活動と願い・問い

①　「かるたをつくろう」に向けての話合いをした。
「幼稚園ってどんなところってきかれたら、どんなことを思思うかな？」

「おじぞうさまー。」
「うん、やっぱりおじぞうさまかな。」
「じぞっこまつりもあるしね。」
「園長先生！」

②　子どもたちが考えた読み札を書き出した。教師が、「次は“わ“から始まる言葉を考えてみましょう」と問いかけると、ワニや輪投げ等様々な言葉が出てきた。話合いの結果 " わ“の読み札は「ワカメ」に決まった。

「ワカメゆらゆらってどう？」
「うーん、僕はワカメがおどってるとかの方がいいなぁ。」

③　読み札の中からだれがどの絵札を描くかみんなで決めた。各自が、自分が表現したいように絵を描いた。墨で下絵を描き、水彩絵の具で彩色していった。

「私は紫が好きだからこれにする」
「素敵な色だね！」
「ワカメの色って緑みたいだけど、ちょっと違うんだよね。」
「そうだよね、緑に別の色を混ぜてみようよ！」
「賛成、じゃあ緑に朱色。」(試しに混ぜてみる)
「わぁー変な色になった。これじゃ茶色じゃない」
「じゃあ黒混ぜてみよう」
「わぁ暗すぎたぁ。今度は青にしてみるよ。上手くいくといいなぁ」
「わぁ！いい感じ！先生、ワカメの色ってこれでどうかなぁ」
「まぁ素敵な色が作れたね。早速塗ってみましょうね。先生も出来上がりが楽しみだな」

＜ねらい＞
・自分の考えを友達に伝えたり、友達の考えを聞いたりして、みんなで力を合わせて「かるたづくり」の活動をやり遂げる満足感と達成感を味わう。
・目標をもって頑張って活動している自分や友達の存在の大切さに気付き、認め合うことで一緒に活動を楽しむ。

＜環境構成の配慮＞
・互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて考えたり、工夫したり、協力したりして、充実感をもってやり遂げるように、一人一人の思いに寄り添いながら、みんなで集まって話し合う時間を十分に確保した。
・イメージがもちやすく豊かな表現や感性を働かせることができるように、自分達の身近な内容でかるたを作るよう援助した。
・感じたことや考えたことを自分で表現し、話合いの場で考えを発表できるように声掛けをした。
・自由に絵を描いたり混色したりできるように、多くの画材を用意しておいた。

＜教師の援助＞
・絵で内容が理解できる、日常生活に関連したかるたにすることで、文字の読めない幼児も活動できるようにした。
・幼児たちが考えた読み札の言葉を、分かりやすいように黒板に書き出した。
・表現する喜びを味わえるように、友達同士で話し合ったり楽しんだりする時間を十分にとるとともに、それぞれの表現のよさを賞賛した。

（かるた遊びで）
「はい！」
「緊張してとれなかったよう！」

④　６月から活動してきた「かるたつくり」は、10月で完成した。出来上がったかるたに幼児たちの喜びは大きく、大歓声とともに達成感を味わうことができた。11月の作品展では、教室に完成したかるたを飾り、１月の正月遊び大会では、かるた遊びを楽しんだ。

<関連する育ちや学び>
・協同性
・言葉による伝えあい
・豊かな感性

5　振り返りと改善したこと

○　絵を描くことが好きではない幼児もいたが、筆を使う楽しさや水彩絵の具で色を塗る楽しさを感じながら活動に取り組み、「自分も作品を作った」という自信をもった。
○　長期間にわたり取り組んだ活動であったため、途中、自分の描きたい絵札が描けなかったり、いざ絵で表現しようとしてもイメージがわかなかったりする幼児もいた。その都度、役割を交代したり、友達や教師の助言により描くことができたり、友達と折り合いをつけながら進めたりすることができた。
○　教師は、着色する際にたくさんの色を用意しておくとともに、混色を体験できるように援助した。初めて絵の具の混色をし、色の変化に感動する幼児もいた。中には、混色をしてみたが思うような色ができず、「できないなあ。違うなあ」と言いながら何度も挑戦する幼児も見られた。試行錯誤をしながら色に対しての関心を深めることができた。
○　協同的な活動の中で、幼児一人一人が発言をし、それぞれの幼児の意見がみんなの役に立っていることに気付くことができた。一人一人が大切な仲間であることを感じ取ることができた。

6　その後の幼児たちの姿

○　「かるたづくり」を通した様々な活動経験は、次の活動へのもととなり、「またやってみたい」「他にもやってみたい」という意欲がよく見られるようになった。活動に対して前向きな姿勢で、自信をもって発言する幼児が増えた。
○　言葉に対しての興味・関心が広がり、「かるた遊びをもっとやりたい」と教師に催促したり、「お家でもかるたを買ってもらった！」と嬉しそうに話したりする姿が見られた。家族でかるた遊びを楽しんだ話を聞くことも増えた。
○　部屋の中や園内など、周りに掲示されているひらがなや文字を積極的に読もうとするようになった。

「Aさんの方が早かったね」
「え？、Ｂちゃんの方が早かったと思うよ」
「じゃあ、じゃんけんだね」
「うん、じゃんけんしよう」
「最初はグー、じゃんけんぽい」
「あ、負けちゃった！」
「次がんばろう！」
「うん、ぼくもがんばる」
「たくさんとるぞ」
「何枚とれたかな」
「数えるの楽しみだね」

小学校　１年生　９月
「いきものとなかよし（生活科）」

主に
「自然との関わり・生命尊重」
「思考力の芽生え」

1　活動の概略

①　芝生広場には、夏になるとアリ、チョウ、バッタなど様々な虫が集まる。児童たちは、虫を捕まえようと必死になって、虫を追いかけていた。
②　捕まえて、教室に持って帰ってきたものの、児童たちは、虫をかごに入れたままでいた。
③　教師が児童たちに「虫さん、そのままで大丈夫かな？」と問いかけると、みんな黙ってしまった。
④　「かわいそうだよ」「おなかすいちゃうよ」「逃がしてあげればいいんじゃない」という声があがった中、ある児童の「じゃあ、飼えばいいんじゃない？幼稚園でも飼ったことあるよ」という言葉から、虫をどのように飼い、育てればいいのか、みんなで考えることになった。

2　教師の願い

★　身近にいる虫と触れ合いながら、命の大切さに気付いてほしい。
★　虫だけではなく、人も生きていくためには、食べ物や住む場所などが必要であり、自分一人だけでは生きていけないことに気付いてほしい。
★　友達の様々な考えを聞き、自分と異なる考え方があることに気付き、試行錯誤する中で自分の考えをよりよいものにしてほしい。
★　興味・関心があることについて積極的に本などから情報を取り入れたり、社会と関わりながら生活をよりよくしていく方法を考えたりすることができるようになってほしい。

3　「架け橋タイム」で得られたこと

★　実施時期　８月
★　場　　所　小学校
★　参 加 者　小学校：教務主任（接続コーディネーター）・１学年担任
　　幼稚園：主任、年長クラス担任
　　保育所：所長、主任、年長クラス担任
★　内　　容
○　幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を小学校でどのように発揮していくのか。
・入学当初、朝の活動で6年生などが手伝っているが、自分でできるのではないか。
・給食の配膳については、幼稚園では自分たちで行っているので、入学後すぐに自分たちで行うようにしてもいいのではないか。
○　保育園、幼稚園でどのような「学び」をしていたのか。それを、どのように小学校に繋げていけばよいのか。
・「言葉による伝え合い」、「協同性」については、集団で育つための基礎であるので、遊びの中で育てられるようにしていく。
○　幼保小で今後、連携してできることは何か。
・学校見学、保幼と一緒に小学校で遊び体験、小学校授業見学、保幼の保育見学
・生活科でのおもちゃ遊びを保幼の園児を招き、実施する等

4　児童の活動と願い・問い

①　虫と仲良くするためにしなければならないことは何かを話し合った。
　えさをあげることや虫にとって居心地のいい場所について、みんなで考えた。

「えさは何をあげたらいいのかな」
「小さな虫とか、あげればいいんじゃないの？」
「幼稚園では、〇〇をあげていたよ」

②　育てたい虫を一人一人考え、同じ虫を選んだ児童でグループをつくった。
　虫を育てる容器に入れる物やエサについて調べたり、考えたりした。

「前にお家で飼ったことあるから、どんなえさを食べるのか、お母さんに聞いてくる」
「虫のお家はどのくらいの大きさにしてあげればいいのかな？」

③　虫の飼育が始まった。えさを家から持ってくる児童もいた。何日かたつと、本で調べたことをもとに環境を変えることを友達と話し合う姿も見られた。

「ダンゴムシは、葉っぱを食べるみたいだよ」
「本に『チョウチョはみつを吸う』と書いてあるよ。虫かごに花を入れればいいのかな？」

④　飼育を始めて１週間がたった。虫が死んでしまったグループもあった。どうしてうまく育てられなかったのか、グループで話し合っていた。

「ああ、死んじゃった。どうしよう」
「お墓を作ってあげようよ」
「なんだか元気ないな。どうしたらいいのかな？」

＜ねらい＞
・身近な動物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にする気持ちをもって関わろうとする。
・虫を育てる方法の話合いを通して、自分と異なる考え方があることに気付き、試行錯誤する中で自分の考えをよりよいものにしていく。
・積極的に情報を取り入れ、よりよい育て方を考えることができる。

＜環境構成の配慮＞
・虫の飼い方の本をオープンスペースに置いておき、必要な時に手に取れるようにしておいた。
・同じ虫を飼いたい児童同士で集まり、主体的に話し合えるようにした。
・教室の空いているスペースを有効活用し、近い距離で話合いができるようにした。

＜教師の支援＞
・教師自身が生命に対する畏敬の念をもち、身近にいる様々な生き物の生きる姿を尊重する姿を示した。
・話合いのルールをみんなで考えて守れるようにした。
・課題解決や振り返りの場面では、児童が自分たちで解決できるように、最小限の声掛けにとどめた。

＜関連する育ちや学び＞
・言葉による伝え合い
・道徳性・規範意識の芽生え
・社会生活との関わり

5　振り返りと改善したこと

○　「虫が嫌い。触れない」と嫌がっていた児童も、グループで協力して虫を捕まえたり、育てたりする中で、虫に対する接し方が変わっていった。小さな命にじっくりと向き合い生命を自分の五感で感じ取れたことが一番の収穫であった。
○　活動が始まった頃、グループ活動中毎回もめごとがあった。「ぼくが虫を一番先に見付けたのに、Ａさんがとった」、「虫かごをBさんが持って行っちゃった」などの声が聞こえることが多かったが、教師が根気強く見守り、適切な援助をするよう努めたことで、次第に協力して虫を育てるようになった。
○　児童同士のつながりを大切にし、教師の援助を最小限にしてきた。児童が困っている時には寄り添い、「どうしたらいいと思う？」と問いかけて、児童に考えを促した。その結果、自分たちで本を調べたり保護者から話を聞いたりして疑問を解決しようとするなど、意欲的に学習に取り組む態度が育ってきた。
○　虫が死んでしまった時に、あまり気にしていない児童も見けられたが、児童たちにもっと命の大切さを感じとってほしいと感じた。虫が死んでしまった時の児童への声掛けを工夫したり、教師自身が身近な生き物の生きる姿を尊重する姿を示したりする必要があると感じた。
○　グループの中での役割分担を児童同士で決めるようにしたことで、自分の役割に責任をもち活動できた。教師が児童一人一人のがんばりを認めるだけではなく、児童同士でも認め合うように支援することで、さらに児童の自己肯定感を高められるようにしていきたい。

6　その後の児童たちの姿

○　以前は教師の指示を待つことが多かったが、先を見通した行動が少しずつ見られるようになった。また、話合いの中で友達の意見を肯定する言葉や、友達との言葉のキャッチボールが増えてきた。児童の交友関係が広がってきたように感じる。
○　生命のとらえ方については、個人差があると感じた。道徳や学活等、全ての学習場面において、機会をとらえて考える場面を設け、自他の生命を大切にする心を育てていきたい。
○　図書館の本などを活用したことから、児童は図書館にはおもしろい本や役に立つ本がたくさんあることに気付いた。国語などの調べ学習をする時にも、積極的に図書館に行って調べようとする児童が多くなった。
○　学級活動で遊びを考える時に、みんなが楽しめることを意識して、ルールを変えたり、チーム構成を変えたりするなど工夫している姿が見られた。

「Ａさんが虫を捕まえてくれた」
「今日はＢさんがえさをあげる番だね」
「この後は、こうしたほうがいいんじゃない？」
「（友達の意見に）いいね。私もそう思う」
「バッタは、稲を食べるってお父さんに聞いたので、お家の稲を持ってきてもいいですか？」
「どれくらい虫が大きくなってるか、タブレットで撮っておこうよ」

小学校　１年生　９月
「いきものとなかよし（生活科）」

主に
「自然との関わり
・生命尊重 」
「協同性」

1　活動の概略

①　休み時間、児童は元気に外遊びをしていた。花壇に咲いている花や木の葉の色などに気付く児童や、木の実を拾い大事に両手に乗せて報告する児童がいた。
②　校庭でクワガタムシを捕まえた児童がいた。「先生、教室で飼ってもいい？」、「えさがないよ」などの声があがり興味が高まり、生き物を飼うにはどうしたらいいかみんなで考えてみることになった。
③　友達と協力して虫を探し、捕まえた虫を飼うことになった。虫が住んでいた環境やえさを考え、虫が気持ちよく暮らせるすみか作りを考えた。
④　虫を飼い、思いや願いをもって世話をしながら、体のつくりや動く様子を観察し、気付いたことを発表し合った。

2　教師の願い

★　自分たちで捕まえた虫の世話をすることで、生命に気付き大切にしたいという思いを高めたい。虫が苦手な児童も、友達と一緒に活動することで少しずつ慣れ、親しみをもてるようにしたい。
★　友達の意見を聞いたり、自分の意見を伝えたりしながら、新しい発見や深い気付きへとつなげたい。
★　グループ活動を通して、目標をもち助け合ったり協力したりする心を育むようにしたい。

3　「架け橋タイム」で得られたこと

★　実施時期　　７月、８月、10月
★　場　　所　　認定こども園
★　参 加 者　　小学校：１年担任　　認定こども園：園長、保育教諭
★　内　　容

〈認定こども園が心がけていること〉
・友達と協力して試行錯誤しながら作品作りをしたり、友達の前で話したり友達の話を聞いたりする活動を意図的に行っている。
・小学校での生活を見据えて、自分の考えを話す、友達の話を聞く、意見を交換するなどの活動を継続的に行っている。

〈小学校が本単元前の保育参観で気付いたこと〉
・園での生活の様子と保育者の園児に思考を促す声掛け。(１日の生活の流れ等)
・遊びの中に生き物との触れ合いがたくさんある。　(野菜の栽培、虫探し、図鑑等)
・表現活動（家での出来事の発表、製作物の工夫点の説明、続き話を考える等）
・保育者の意図的な環境設定や支援の中で、園児は遊びながら学んでいることを実感した。

〈小学校が本単元後に認定こども園と共有したこと〉
・児童のつぶやきの中に思いや考えがある。自分の意見をもつことで、時には友達とぶつかることもあるが、折り合いをつけながら話合いができるようになってきている。
・写真を利用した活動の振り返りは児童がイメージしやすく、分かりやすい。
・園では表現が得意でなかった児童が小学校で活躍している。児童の得意な面を引き出すことは自信につながる。

4　児童の活動と願い・問い

①　見つけたことのある虫や、虫がいた場所について発表し、虫探しに必要な物を話し合った。
〈虫探しに必要な物〉
・虫あみ、虫かご

「校庭にトンボが飛んでいたよ」
「花壇にテントウムシがいたよ」
「ダンゴムシはジメジメした所が好きなんだよ」
「しかけをしたら捕まえられるかな」

②　グループで虫探しをした。児童たちは場所を移動しながら夢中で取り組んだ。虫が逃げないようにこっそり近づいたり、石を動かして虫が隠れていないか確かめたり、工夫していた。ペットボトルにナスを入れた仕掛けには、コオロギがかかっていた。

「あっちにバッタがいるよ」
「木を叩くと虫が動くよ
「花壇に行ってみよう」
「トンボは羽の所を持つんだよ」

③　虫がすんでいた所を思い出し、家作りに必要な物を考えた。草、枯葉、小枝、石、木の実などを材料にし、どんな家にしたら虫が喜ぶか意見を出し合い、協力して作ることができた。

「葉っぱが枯れないように水を入れよう」
「図鑑で調べてみよう」　「名前をつけようよ」
「長生きしてほしいな」
「土を入れたら卵を産めるかな？」

④　虫の世話を通して体のつくりや動く様子を虫眼鏡を使って観察したり、タブレットで撮影して何度も見返したりした。見付けた「虫の不思議」を発表し合った。

「元気にしてるね」
「葉っぱが枯れちゃった。入れ替えよう」
「顔の形が三角だね」

＜ねらい＞
・学校のどんなところにいるのか考えながら虫探しをすることを通して、虫と親しむ。
・捕まえた虫を飼い、すみかやえさなどを工夫しながら、虫と親しむ。
・飼っている虫と関わりながら、体のつくりや動く様子を観察し、虫の不思議に気付くことができる。

＜環境構成の配慮＞
・児童の目の高さに虫の写真を掲示し、興味・関心を高める。
・昆虫図鑑を教室に置いておき、いつでも見られるようにする。
・学校の地図に虫がいた場所や写真を加えて、児童が確認できるようにする。
・虫が好きな児童も苦手な児童も協力できるグループ編成とする。

＜教師の支援＞
・事前に関連する絵本の読み聞かせを行い、興味・関心を高めた。
・話合い活動で意見がまとまらない時には、めあてを確認させ、達成するにはどうしたらいいかみんなで考えさせた。
・虫を見つけた場所の写真を撮っておき、虫がいる環境を振り返ることができるようにした。
・虫の家作りでは、児童が考えた材料の他に、ヒントとなる材料を準備し、自由に使えるようにした。
・児童の活動時に「どうしてそうしたの」と質問し、思いや考えを引き出すようにした。

＜関連する育ちや学び＞
・思考力の芽生え
・言葉による伝え合い

5　振り返りと改善したこと

○　「架け橋タイム」を通して、園児の様子や保育者の思いを知ることができた。園児の経験していることや成長過程を知り、つながりを意識した指導や支援に生かすことができた。
○　保育者に授業を参観してもらい、保育者の視点で気が付いたことを聞くことができたのは、大変勉強になった。卒園した児童の成長についても伝えてもらい、児童を認め励ますよい機会となった。
○　グループ活動では児童の班長がリーダーとなって学習を進めていった。時には、トラブルもあったが、話し合うことで折り合いをつけていった。今後も、様々な場面で全員がリーダーになる機会を意図的につくり、一人一人が輝く場の設定に努めていきたい。
○　生き物を飼うにあたり、環境を整えたりえさをあげたりして世話をすることを通して、生き物には命があることを実感していた。「名前をつけよう」「長生きしてほしい」などの発言が聞かれ、生き物に親しむ姿が見られた。
○　児童が理解しやすいように、写真や掲示物を利用して視覚的にも学習内容を捉えられるようにした。個人差が大きく見られる時期であるため、児童の不安を取り除き、安心して活動できるように配慮していきたい。
○　「架け橋タイム」で知ったことや架け橋プログラムについて職員研修で伝えた。全職員で共通理解を図ることができてきた。学びのつながりへの意識を高めていきたい。

〈職員研修で伝達した内容〉

・園での一日の生活について　　・園での行事や当番活動について
・園でのひらがな練習の取組について・園での体験活動について
・保育者の指導や声掛けについて　　・架け橋プログラムについて
・本自治体での幼保小の連携について

6　その後の児童たちの姿

○　虫の家作りを通して、児童は自分の思いや考えを積極的に友達に伝えるようになった。考えがぶつかることがあっても、「よりよい虫の家にしたい」という共通の目標に向けて力を合わせることの大切さに気付くことができた。

　その後、体育科のドッジボールの授業では、めあてを「みんなが楽しめるゲームをしよう」としたが、ボールを独り占めせずみんなに渡そうとする姿や、ドッジボールが得意な児童が苦手な児童をサポートする姿が見られた。

　今後、他教科においても、課題の解決に向けみんなで一緒に考え、協力する場面を意図的に取り入れ、継続していくことで、児童の協力性を高めていきたい。

○　この活動を通して、生き物や生き物をとりまく環境への興味・関心が高まった。秋も深まり木の葉の色が変わったことや、生い茂っていた草が少なくなっていることに気付き、報告する児童がいた。以前虫を捕まえた場所でもう一度虫探しをする姿も見られた。

「前はなかった実が落ちているよ」
「バッタがいないね」
「葉っぱの色が変わったよ」
「ダンゴムシまだいるかな？」

Ⅲ　令和５年度茨城県幼児教育研究推進校の取組

１　常陸太田市立太田進徳幼稚園の実践研究
２　つくば市立大穂幼稚園の実践研究

「たすけて～　きょうりゅうにたべられちゃうよ」
常陸太田市立太田進徳幼稚園　　５歳児

「たのしかった　おおきなかぶのげきあそび」
つくば市立大穂幼稚園　　４歳児

1　常陸太田市立太田進徳幼稚園の実践

研究主題
豊かな感性を育み、自分の思いを素直に表現する幼児を育てる支援の在り方
～幼児理解を図るドキュメンテーションの活用を通して～

1　主題設定の理由

本園は明治36年､本県で４番目に開園されて以来､創立120年の歴史と伝統をもつ幼稚園である。「感性と表現豊かなたくましい園児を育てる」を教育目標とし、園外保育を重視して地域の方々との交流を図ったり、運動遊びを日常的に取り入れたりする中で、幼児の豊かな感性を育む教育を進めている。

昨今、幼児を取り巻く社会環境の変化に加え、新型コロナウイルス感染症に影響された生活が３年以上に及ぶ中、人とのコミュニケーションもままならない環境を余儀なくされてきた。このような社会において、人とのコミュニケーションを円滑にとるうえで、自分の思いや考えを言葉等で表現することが基礎になるとすれば、幼稚園に課せられた役割は、幼児教育における育みたい資質・能力を基盤とし、「自分の思いを素直に表現する幼児の育成」を図ることであると考える。

本園の幼児には、親や教師、友達に対して、自分の思いを素直に表現できなかったり、または相手の意見を素直に受け入れられなかったりする様子が随所に見られる。

そこで１年次は、保護者へのアンケートを実施し、幼児の実態を把握するだけでなく、保護者の思いにも寄り添い共有する中、ドキュメンテーションを活用し、幼児が自分の思いを素直に表現するための支援方法を探ってきた。

２年次は、幼児一人一人が思いを素直に表現できるまでの過程を分析し、発達段階に応じた支援法を教師間で共通理解し、どのような経験が必要かを探ることとした。

小学校入学後、さらには 10 年後 20 年後の幼児の姿を想像した時、様々な課題が自分の目の前に現れても、自分の思いを素直に相手に伝えること、そして相手の考えを素直に受け止めることができれば課題解決の糸口を見つけることができる。そのためには、幼児期に自分の思いを素直に表現する経験が重要だと考える。そこで、相手の思いや考えを素直に受け入れ、自分の思いを素直に言葉で表現するために必要な支援の在り方とは何かを、ドキュメンテーションを活用しながら追究しようと考え、本主題を設定した。

2　研究のねらい

幼児理解を図るためにドキュメンテーションの活用を通して、豊かな感性を育み、自分の思いを素直に表現する幼児を育てるための支援の在り方について探る。

3　研究の内容

（１）研究の方法

１年次と２年次で、下記のとおりの方法で研究を進めた。

	１年次	**２年次**
①	幼児教育において育みたい資質・能力を踏まえた教育課程の編成	
②	幼児が主体的・対話的で深い学びを実現する環境の構成の工夫・改善	
③	幼児一人一人が自分の思いを言葉で表現できるまでの過程の把握	幼児一人一人が自分の思いを言葉で表現できるまでの過程を分析・改善
④	幼児一人一人が自分の思いを言葉で表現する場の確保と工夫	幼児一人一人が自分の思いを言葉で表現する場の確保と工夫・改善
⑤	幼児理解につながるドキュメンテーションの活用法の工夫	幼児理解につながるドキュメンテーションの活用法の改善・充実
⑥	職員間での情報共有・共通理解を図るための研修の推進とカリキュラム・マネジメントの実施	職員間での情報共有・共通理解を図るための研修の推進とカリキュラム・マネジメントの実施による幼児教育の活性化

（２）研究の計画

【１年次】

○　幼児教育において育みたい資質・能力を踏まえ、週案の見直しを図る。（毎月）

○　定期的に園内研修を実施し、研究の推進を図る。（毎週金曜日）

・「自分の思いを素直に表現する幼児」の育ちをみとるための共通理解を図る。

・ドキュメンテーションの作り方と使い方の研修を重ねる。

・ドキュメンテーションの活用の場を広げる。(教師同士、教師と幼児、幼児同士、教師と保護者、幼児と保護者)

・幼児教育において育みたい資質・能力についての理解を深める。

○　幼児一人一人の状況把握のため、実態調査を行う。（７月・１月に実施）

○　教育活動の可視化を図るための環境を整える。（映像モニターの意図的な設置）

○　地域と触れ合う園外保育や日常的な運動遊びを実施する。（年間計画に位置付けて実施）

○　職員間で情報交換をし、幼児一人一人の心情面の共通理解を行う。（毎日）

【２年次】

○　幼児教育において育みたい幼児の姿の変容を把握する。（６月保護者アンケート実施）

○　幼児が自分の思いを素直に表現するための支援法の研究を推進する。

（研修後の反省と改善策の検討）

○　ドキュメンテーションの有効活用の充実を図る。

○　幼児一人一人の心情を共通理解するため、教師間での情報共有の工夫・改善を図る。

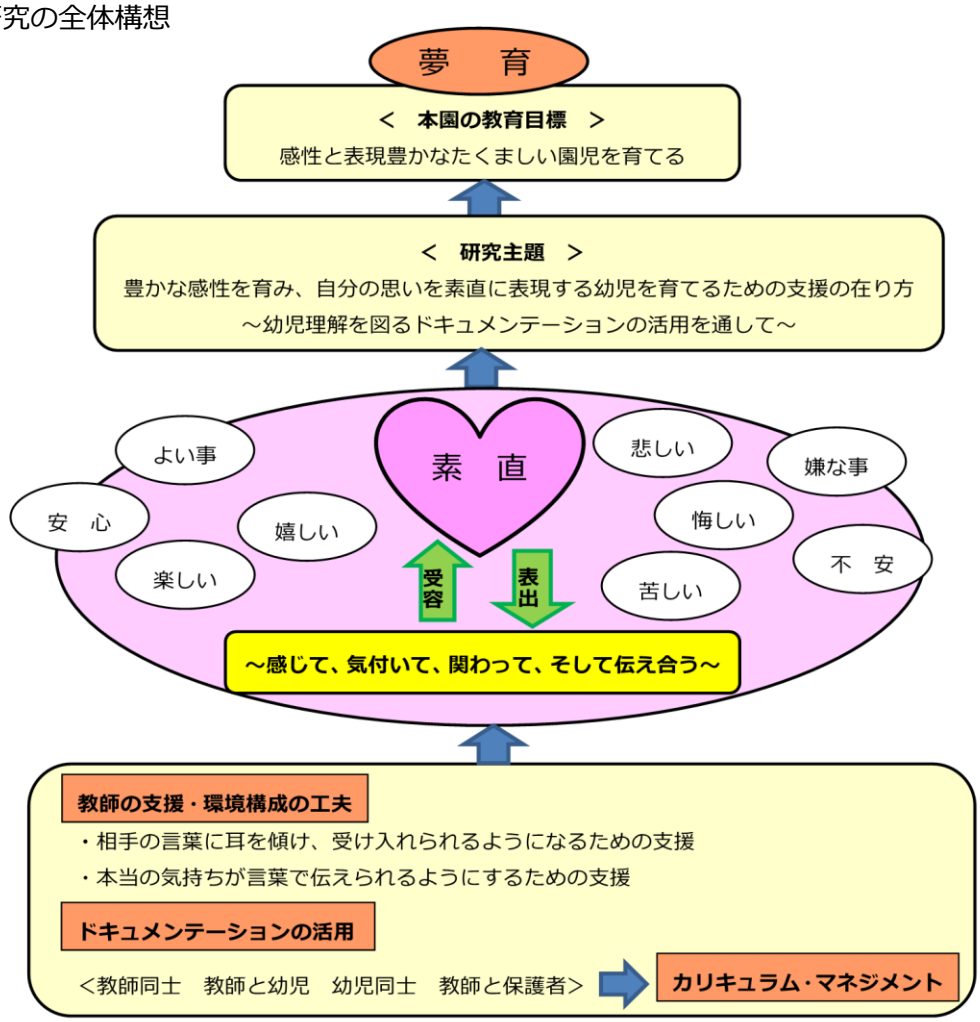
（クラスごとに毎週実施）

○　定期的に園内研修を実施し、研究の充実を図る。（毎週金曜日）

○　地域と触れ合う園外保育や運動遊びを通して、教師の関わり方を見直し改善していく。

（実施後に評価し改善策の検討）

（３）研究の全体構想



4　研究の実際

（１）幼児教育において育みたい資質・能力を踏まえた教育課程の編成

○　週案の見直し➡教育課程の編成

R3
週案のねらいを、資質・能力の３つの柱に分けて表示した。

評価

ねらいに分けたことで、３つの柱の理解は深まったが、分けることの難しさもあった。

改善

R４
ねらいではなく、内容を３つの柱で分けた。

評価

内容は３つの柱の観点に分けやすいが、TT・支援員との共通理解の際に意図が漠然としてしまった。

改善

R５
週案の教師の援助・環境構成を３つの柱の視点に分けた。
具現化したことで、TT・支援員と共通理解がしやすくなった。

（２）幼児が主体的・対話的で深い学びを実現するための環境構成の工夫と改善

工　夫
・自由に使える空間の確保
・幼児が作った環境を維持できる場の設置
・ドキュメンテーションの掲示

改　善
・自由に使える空間の拡大
・幼児が自ら考えて必要な物を用意できる環境作り
・幼児同士の話し合いや振り返りの際の動画の活用

（３）幼児一人一人が自分の思いを言葉で表現できるまでの過程を分析・改善

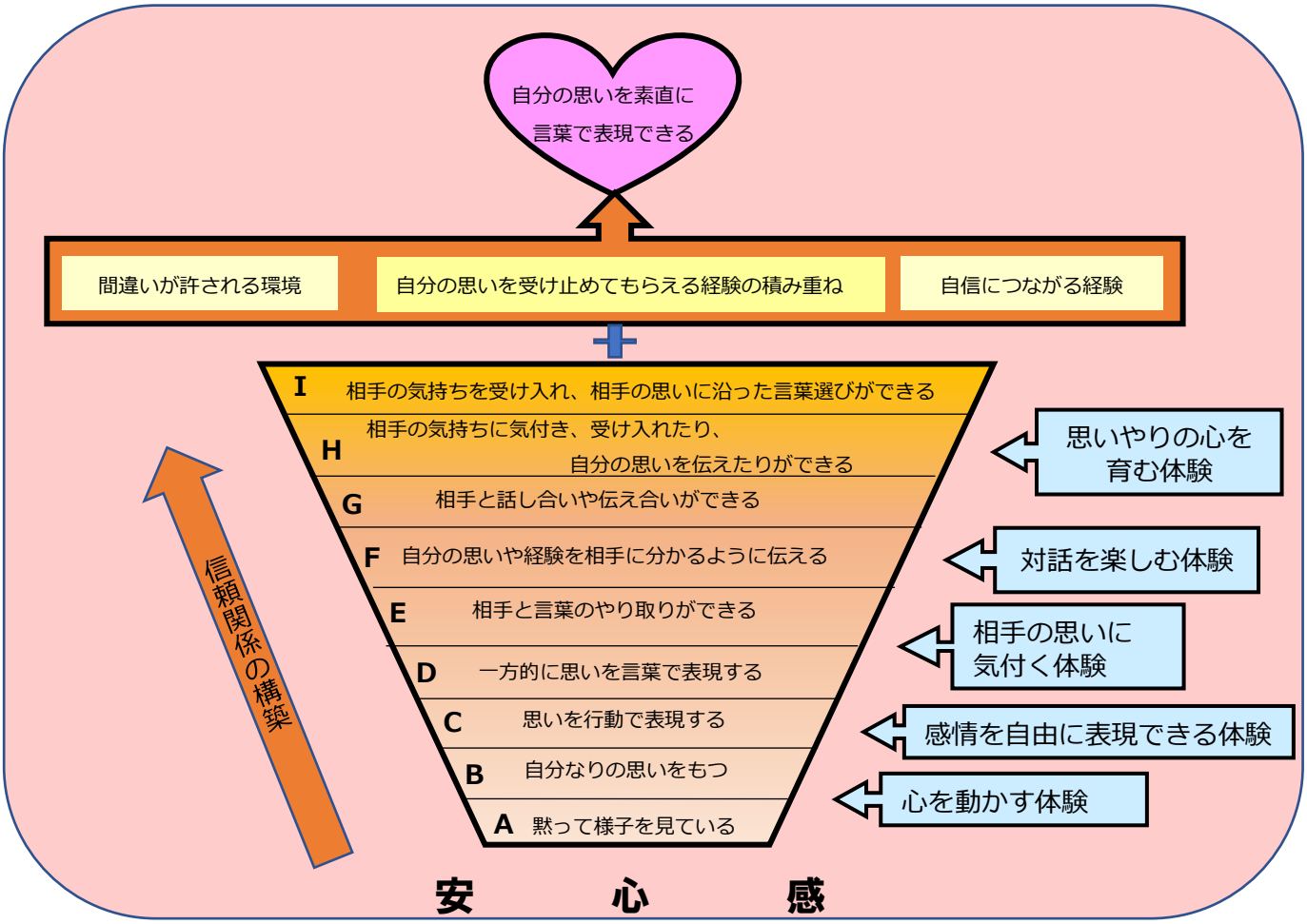


図１～本研究における幼児が自分の思いを素直に表現できるまでの流れ～

この図は、幼児一人一人が自分の思いを素直に言葉で表現できるようになるための過程を分析し、A~Iの段階で表示した。そして、そのために必要な体験や経験を加えた図である。この図を基本とし、幼児一人一人に応じた支援を行ってきた。

（４）幼児一人一人が自分の思いを言葉で表現する場の確保と工夫・改善

工　夫

・幼児が一人で発言する場の確保

園外保育…買い物へ行き、店員に自分の欲しい物を伝える。

運動会・発表会　開閉会式の司会進行やプログラム紹介を一人で行う。

当番活動…職員室へ行き、園長へ出欠報告をする。全園児の前で司会進行や感想発表をする。

・幼児の気持ちの受容・共感

・幼児の気持ちの言語化

改　善

・幼児が一人で発言する機会の継続（意図的な仕掛け）

・ありのままの幼児の姿の受容（訂正するのではなく認める）

・クラスでの話し合いの継続

（５）幼児理解につながるドキュメンテーションの工夫・充実

（①教師同士②教師と幼児③幼児同士④教師と保護者⑤幼児と保護者）

工　夫

①TT・支援員が、担任の作ったドキュメンテーションを見ながら幼児の姿の把握・理解

②活動の導入や振り返り時に写真の活用

③活動の共通理解を図るための活用

④懇談会・成長の記録でドキュメンテーションの活用

⑤幼児の様子をドキュメンテーションで掲示（送迎時・保育参観時）

改　善

①幼児の姿の把握・理解に、写真に加え映像でのドキュメンテーション記録の活用

②活動の振り返り・課題解決時に映像の活用

③話し合いの材料としての活用

④写真及び録画記録の活用

資質・能力の３つの柱の提示

⑤幼児の作品等具体物の掲示

①　④

①　④

②　③

②　③

⑤

⑤

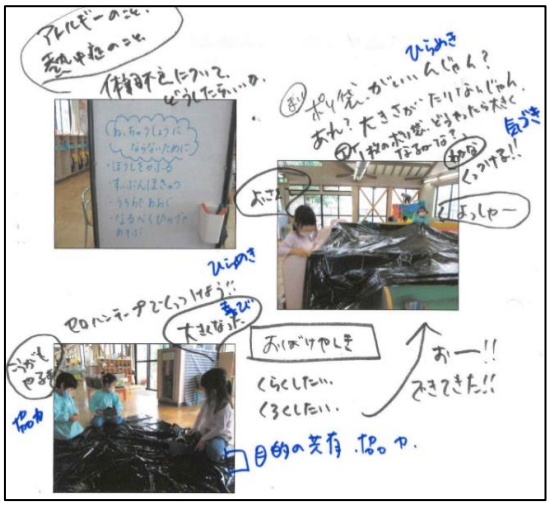
（６）職員間での情報共有・共通理解を図るための研修の推進とカリキュラム・マネジメントの実施

工　夫

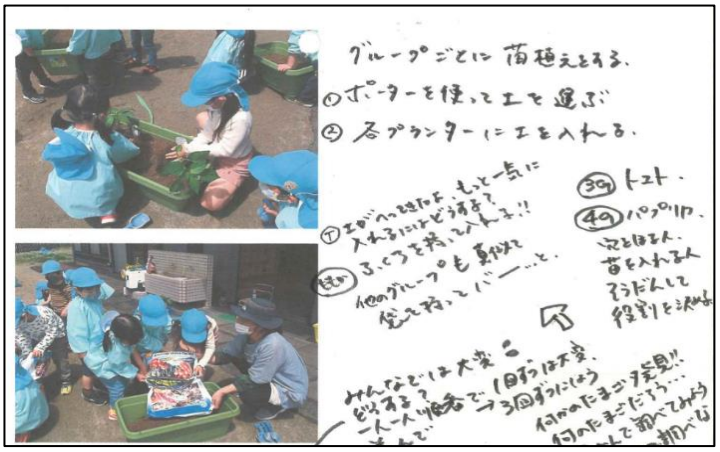
・クラスごと、担任・教頭・園長間、全職員等、様々なメンバーで、ドキュメンテーションを活用した情報共有
・全職員による井戸端会議（自由に何でも言い合える場）の実施
・定期的な短時間研修の実施
・毎日、休憩の時間を利用した情報共有

改　善

・ドキュメンテーションをより活用するためのカメラやテレビ台数の増加
・行事を映像で確認することによる振り返りと改善点の共通理解
・教頭・園長が仕事を分担することによる、クラスごとに話し合う時間の確保



<日々の記録より>

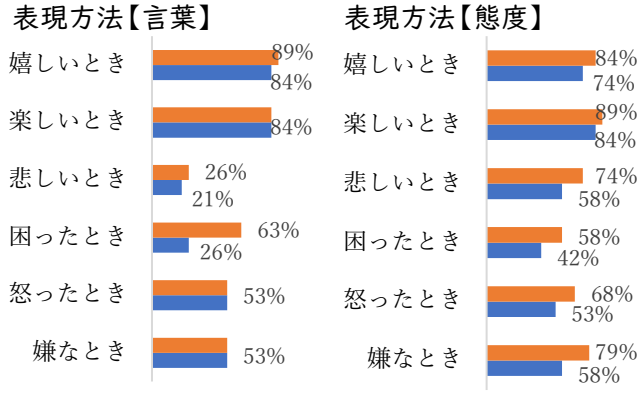


◆幼児の実態把握のため、保護者へのアンケート実施（R4 青・R5 オレンジ）

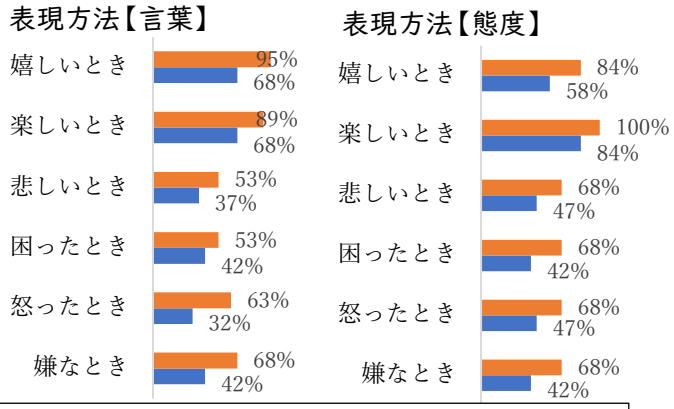
○　友達関係、親子関係において、我が子は、自分の思いをどのように表現しているか等、４つの観点でアンケートを行った。その結果を分析し、研究の成果と課題を明らかにした。

<アンケート結果からの抜粋>

①友達関係（自分の思いを言葉や態度で表現している）



②親子関係（自分の思いを言葉や態度で表現している）



〈考察〉

R4 と R5 の結果を比較すると、どの項目においても言葉や態度で表現している姿が見られた。特に、親や友達に対して、自分の負の感情である怒りや困り感などを素直に表現できるようになったことは大きな成果であると考える。

5　保育の実践事例

事例１　「３年保育３歳児４月　幼児が思いを安心して表現できる環境を整えるために
～ドキュメンテーションを通して～」

不安ですよね…
早く安心して
もらいたい…

ドキュメンテーションで
見てもらった方が
様子が伝わるよね

朝、泣いてたけど大丈夫かしら？
どんなことをしているのかな？
どんな遊びをしているのかな？
給食は食べられているのかな？
お友達とは遊べているのかな？
幼稚園での様子が気になる

不安・心配・悩み

送迎時の
コミュニケーション

プラスα

動画の方が、我が子の行動の経緯が分かる

生活の様子の視聴
・入園３日目
・給食始まり日
・懇談会

どのように
過ごしているのか
が分かる

映像を見せながらだと、伝えやすいな

遊びの様子

おやつの時間の様子

身の回りのことに
取り組む様子

給食の時間の様子

友達と関わる様子

給食の量

製作物の掲示
・その都度掲示

タイムラインでの発信
・毎日発信

素敵に描けたね

楽しみにしている

待ち遠しい

朝は泣いていたのに、元気に遊べてるんだな

ママ見て！
○○描いたの！

写真が入っていることで様子がとても分かりやすい

クラスだより
・毎月発信

我が子の成長している姿がよく分かる

成長の記録
・毎月発信

評価　ただやっていることだけを伝えるだけになっていないか。

改善　今の姿がどんな成長につながるのか、担任の保育の意図なども盛り込んで発信できるようにする。

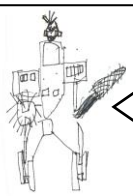
〈事例１の考察〉

・初めての集団生活は、親も子も緊張や不安、悩み、心配をたくさん抱えている。動画や写真を発信し、園生活の様子を知らせていくことで、園生活でどのような経験をしているのか、どんな育ちがあるのかを保護者と共有し、保護者の安心感、安堵感につなげることができた。保護者も幼児も安心できる雰囲気は、幼児と関わる環境づくりの土台となり、幼児が思いを安心して表現できる環境につながると考える。

事例２　「３年間を見通して個に応じた支援を探る　～Ａ児のありのままの姿を受け止めて～」

※表記：　幼児と教師の関わり　保護者と教師の関わり　教師の支援

３歳時の姿：恥ずかしい気持ちが強く、自分の思いを言葉で表現することが難しかったが、手先が器用という得意分野を生かし、友達や教師に認められる環境の中で、心を動かす体験、感情を自由に表現できる体験が重ねられるように支援した。**P.38-図１-ＡＢＣ**



本児が描いたシンカリオンの塗り絵（男の子用）

本児が描いたドラミちゃんの塗り絵（女の子用）

【２月】絵の得意な父親と一緒に描いた塗り絵を喜んでもらったり、教師に認められたりする経験が自信につながった。

４歳時の姿：進級をきっかけに笑顔が増え、友達や教師との会話を楽しむ姿が多く見られるようになったが、自分の思いが通らないと泣いたり怒ったり、気持ちをコントロールできない姿があった。また、やりたいことを優先させて活動が止められない姿が見られた。感情を自由に表現できる体験、相手の思いに気付く体験を重ねながら、自分で気持ちの折り合いをつける方法を学んでいけるよう支援した。**P.38－図１-ＣＤＥＦ**

【５月】Ａ児の思いを教師が言葉にして伝えることで、自分の気持ちを言葉で表現する方法を学んでいった。気持ちを言葉で伝えることで、気持ちをコントロールできるようになった。**P.38-図１-ＣＤ**

【４月】朝の時間を利用し作品を自由に見られる時間を設けることで、幼児・保護者・教師の会話が広がった。

クラスの作品公開

【６月】「大丈夫だよ…」という言葉の中には様々な感情が含まれていることを理解し、Ａ児の思いを受け止め、クラスの中で共有することでＡ児の自信につなげた。**P.38-図１-Ｅ**

【６月】友達に手を差し伸べる姿を『成長の記録』で保護者に伝える。我が子の成長を肯定的に受け止めることができるように伝えることで、保護者の我が子に対する言葉掛けが変わった。

6月の姿

困っている友達にそっと手を差し伸べ助けてあげようとする姿が見られました。いろいろな事に気付き、自分がどうしたらよいかを考えて行動する姿が増えました。気持ちを言葉で伝えることが、上手になっています。

保護者からの感想・コメント

心配になって大丈夫かなと思っても手をさしのべることはなかなかできることではないので成長を感じました。このままやさしい気持ちを持ちつづけてほしいと願います

【２月】日直の仕事を引継ぐ姿から、我が子が５歳児になった姿をイメージし、楽しみにしている様子が伺えた。友達と比べることなく、Ａ児のペースで成長していく姿を共有することで、保護者の心の安定を促すと同時に、Ａ児の心の安定にもつながった。

2月の姿

日直の仕事を年長さんに教えてもらいながら、少しずつ心の準備をしています。自分の困っていることを言葉で伝える姿が増え、解決するまでの時間が短くなりました。自分から解決しようとする姿は、とても頼もしいです。

保護者からの感想・コメント

年長さんに教えてもらう姿を見て、来年の今と同じはたくさんも下の学年の子達に教えるようになるのかと成長が楽しみになりました。

【２月】声を掛けずに見守っていると自分から「やりたいけどできない…」と伝えてきた。失敗や挫折に臆病な姿を克服できるよう、Ａ児の思いに寄り添いながら、不安な気持ちを言葉で伝えることの大切さを伝えていくと、次第に気持ちの折り合いが付けられるようになった。**P.38 図-１-ＣＦ**

５歳時の姿：５歳児としての自覚をもち、今まであまり関わらなかった友達にも積極的に話しかけ、遊びをリードする姿が増えた。９月に入園してきたＢ児の存在を受け止め、自分から声を掛けて行動を促したり、今までの自分に置き換えて相手を認めたりと、対話を楽しむ体験、思いやりの心を育む体験を重ねながら、自分の思いを素直に表現できるよう支援した。**P.38-図１-ＦＧＨＩ♡**

【５月】新しい環境に慣れ、友達関係も広がり、自分のしたい遊びを実現させることを楽しむようになった。思いが伝わらない悔しさを味わうことも大切と考えて見守り、思いを友達と伝え合う経験を重ねられるよう支援した。**P.38-図１-ＧＨ**

【６月】「父親との会話がきっかけでＡ児の考えが変わり、細かいことを気にしないようになった」と母親から話があった。子育てには父親、母親、それぞれの役割があることを共有した。

【９月】Ａ児が自分で作った動くロボット下に変身した姿を写真で掲示した。クラスの友達だけでなく、異年齢児や大人に「すごいね」と認められる経験から、気持ちを言葉で表現することが増え、自信として積み重なっていった。**P.38-図１-♡**

【７月】クラス懇談会の中で、太鼓の練習動画を見てもらう。生き生きと取り組む姿を可視化することが、成長を確信することにつながった。

【９月】夏休み明け、「早く行きたいって言うので早く来ました」と言う母親の表情は明るく笑顔であった。確実に変容してきているＡ児の思いに寄り添う母親の姿を認めることで、母親にも変容が見られた。

【10 月】
９月から入園してきたＢ児に声を掛け、気遣う姿が見られたため、意図的に席を隣にして２人の関わりを見守った。初めての集団生活を自由気ままに過ごすＢ児に対して「僕もりす組のとき同じことやったなあ」と過去の自分を振り返り、つぶやいた。Ｂ児を非難することなく、受け入れられる心の余裕が見受けられるようになった。**P.38-図１-ＨＩ**

【10 月】降園時を利用してＢ児との関わりの様子を具体的に伝えた。家庭でも幼稚園の話をするようになり、たくさんの友達の名前が出てくるようになったと話があった。

＜事例２の考察＞

・３年間の長いスパンで成長を見守ることで、無理のない安心した環境のもと、幼児は素直に自己表現できるようになっていくことがわかった。
・幼児の成長はその時の状況や心情によっても変化し、行ったり来たりを繰り返しながら、少しずつ自分の思いを素直に表現できるようになっていくため、教師が常に幼児の味方になり、ありのままの自分を表現できるように寄り添うことが必要であることが再確認できた。
・幼児が自分の思いを素直に表現できるようになるためには、保護者の存在が大きく関わっており、教師が保護者との関係性を密にしながら成長を共有することで、幼児の心の育ちが促されることがわかった。それと同時に、保護者自身も素直に自分の思いを話せるようになっていった。

事例３　「３年保育５歳児１月末～２月　スペシャルランド開催に向けて
～主体的・対話的活動を通して～」

クラス遊びの中で、お店屋さんが始まった。「もっとお客さんを呼びたいね」「前の年長さんたちもお店屋さん開いてくれたよね」とつぶやきがあり、クラスで話し合い、おばけ屋敷・水族館・ポケモンセンターを作ることになった。

見守る・言葉のつなぎ

スペースの確保・材料準備

○クラス全体での話合い　（1/18）
・担当を決める。意見発言
○グループでの話合い
（環境づくり）対話
○グループごとに発表する
（使用したい場所・用具）発表
○環境設定
・用具を運ぶ　協働
○クラス全体での話合い
（開催日・お客さんについて）
意見発言
○グループでの話合い
（必要な材料・道具）対話
○材料集め
○製作活動　意見交換・相談
○お客さんになってみる（2/７）
意見交換　評価
○クラス全体での話合い
（気付いたことの発表）
意見発言　改善
○改善点への作業（2/８）

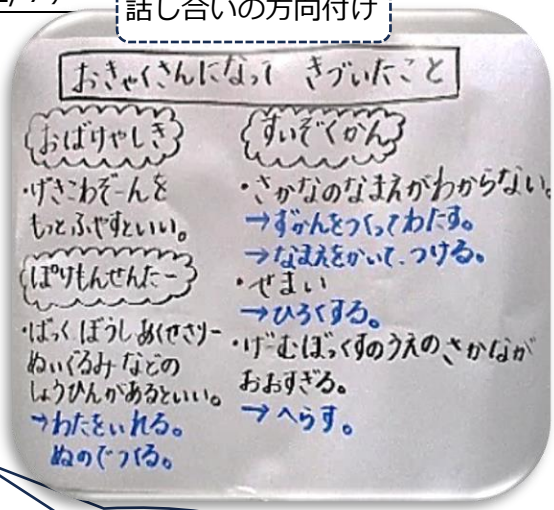
担任同士での情報共有

職員間での情報共有

言葉の整理・活動を方向付ける

思いの橋渡し

話し合いの方向付け



上手くいかなかった

たくさん
作りすぎちゃった

どうしよう…
困ったな…
失敗しちゃった…

看板の柱が
どうしても立たない…

まちがえちゃった

間に合わない

作りすぎ
ちゃった物で
何か作れない
かな

男の子と女の子
のプレゼントを
分けたいんだけど
どんな物がいい
と思う？

ぼく
押さえて
るね

この箱をこの向きで
立ててみたらどうかな

○クラス全体での話合い
（活動を進める中での困り感）
・困っていること　（2/16）
・上手くいかないこと
相談　評価

手伝うよ
色を塗れば
いいのね

キーホルダー作りが
間に合わない

わたし
紐を通すね

○最終確認

（スペシャルランドオープンに向けて、準備物をクラス全体で協力し、作り上げる）

協働　改善

職員間での
情報共有

ぼくが切る

ぼく枚数
数えるね

ぼくは
丸を書く

改善点を全員で共有

懇談会（2/25）

保護者との
情報共有

これまでの様子が
よく分かるわ

○保護者がスペシャルランドの参観前に懇談会を実施し、映像とドキュメンテーションで幼児の活動の経過を知らせた。

懇談会終了後に
参観する。

楽しんで
いるな

いらっしゃいませ～
どれがいいですか？

保育参観（2/25）

○スペシャルランドオープン！

・各コーナーで保護者、在園児をもてなした。

どれがいい？

お魚のマークの
コインを出してね

どのコインを
渡せばいいのかな

音を出して
怖がらせよう

いろんなお化けを
作ったんだね

思いの橋渡し

おばけやしきの
受付はここでーす

保護者による保育参観

話をしていた
のはこれか

いらっしゃいませ

わくわく
たのしみ

イルカショー
始まるよ

年長さん
すごいな

異年齢児との交流

〈事例３の考察〉
・幼児一人一人が、緊張や不安を感じることなく、安心して周囲の環境に関われるような雰囲気をつくることが、幼児が"やりたい"という意欲をもち、主体的に環境に関わり、活動を展開していくことにつながったと考える。
・４歳児の時に、幼児の成長・発達、育ちの道筋を捉え、一年後を見通した教師の意図的な関わりをしてきた。楽しいこと、嬉しいことには共感し、苦労、困難は、必要に応じて支援し、幼児が自分の力で乗り越える経験を積んで進級した。そのような経験が、自分の意見を発言する、相手の意見に耳を傾ける、困った時は相談する、という姿につながったと考える。
・日々園生活を送る中で、教師が、幼児同士が話し合う場を意図的に設定していくことで、思いを伝える経験を重ねてきた。その経験の積み重ねが、自分の思いを素直に表現しながら、対話的活動を存分に楽しむ姿につながったと考える。

６　成果と今後の課題　　※P.1-（１）研究の方法の順番で表示

（１）　成果

①　週案を作成するにあたり、評価・改善しながら資質・能力の３つの柱について学んできたことで、幼児に対する思いや関わり方等、教師間で共通理解を図ることができた。また、見直しを繰り返してきたことで、幼児教育において育みたい資質・能力についての理解が深まった。

②　興味・関心をもって積極的に関わりたくなるような環境を工夫・改善してきたことで、幼児一人一人が自分のやりたいことを明確にし、試行錯誤しながら主体的に行動する姿が増えた。また、意図的にクラスやグループで話し合う機会を設け、ドキュメンテーションを通して可視化することで、幼児同士が互いの思いを理解し合い、対話的で深い学びにつなげることができた。

③④　幼児が自分の思いを言葉で表現する場を意図的に設けながら、認めてもらう経験やできたという経験を繰り返し重ねてきたことで、自分の思いを素直に表現したり、自信をもって表現したりする幼児を育成することができた。

⑤　写真や動画を用いて保育を振り返ることのできるドキュメンテーションの活用は、幼児の育ちや課題を明確にし、共通理解を図ることに有効であった。幼児に対しては、振り返りとして活用することで、自分の姿を客観的に受け止め、今後の行動につながるきっかけをつくることができた。保護者に対しては、懇談会等で活用することで教師の思いや幼児の成長の姿を明確に伝えることができた。教師同士では、共通理解がスムーズになり、幼児の育ちや課題の明瞭化が図れた。振り返りから評価につなげやすくなったことも大きな成果である。テレビやカメラの台数を増やすなど、環境を整備することが活用の継続に有効かつ不可欠であった。

⑥　全職員で全園児の情報共有・共通理解を図る研修を進める中で、教師自身が相手の話を聞き、互いの意見を素直に受け入れる関係性を構築することができた。また、カリキュラム・マネジメントを計画的かつ組織的に進めることで、教師の質の向上につながった。

（２）　今後の課題

①　幼児教育において育みたい資質・能力を踏まえた教育課程を再編成していく。

②　教師の意図を明確にした主体的・対話的で深い学びを実現させるためのさらなる工夫・改善に努めていく。

③④　本園の取り組みである自分の思いを素直に表現する幼児の育成のために、間違いが許される環境作り、自分の思いを受け止めてもらえる経験の積み重ね、自信につながる経験がさらに充実していくよう取り組んでいく。

⑤　ドキュメンテーションの評価・改善を図るため、園の取組の発信を保護者がどう受け止めているのかのアンケートを実施し検証を行う。

⑥　職員間の情報共有・共通理解をさらに進めるために、クラスごとに話し合う時間の確保や全クラスの職員が同じ部屋で話し合いをする場の確保等、環境設定を工夫していく。

今回の研究を通して、自分の思いを素直に表現できる幼児を育てるためには、幼児の気持ちを受け止める側の教師や保護者の関わりが、いかに大切なことか、改めて実感することができた。

そのための共通理解の手段として、ドキュメンテーションの活用は、大変有効であった。今後も活用の仕方を工夫しながら自分の思いを素直に表現できる幼児の育成を図っていきたい。

2　つくば市立大穂幼稚園の実践

研究主題

幼児期における豊かな遊びの創造

～小規模園におけるよりよい保育を目指した園内研修を通して～

1　主題設定の理由

幼児は、自発的な「遊び」を通して、人や物と関わり、感性や言葉を豊かにする。また、自然の美しさや不思議さなどに気付き、生活に必要な知識や技能を身に付けるなど「生きる力」の基礎を学んでいる。しかし、遊びは幼児の自発性によるものという考え方に教師が縛られ、ともすれば幼児を放任しているだけになり、学びにつながる遊びにはならなくなってしまう。教師には、遊びが幼児の発達を促進することを認識し、学びにつながるような豊かな遊びの環境を構成していくことが求められる。

園児数が多く、学級が複数あった時代には、職員数も多く、自然と多くの先輩教師の後ろ姿を見て学ぶといった OJT が日常的に行われていた。しかし、近年、公立幼稚園の園児数減少とともに小規模の幼稚園が増え、単学級となり職員数も減少している。本園もその一園である。また、働き方改革の推進により職員・支援員を含めた全職員が集合して研修を行う機会が少なくなっている現状もある。保育の中で「遊びが育む学びの未来」を充実させていくには、幼児にとって身近な存在である教師の関わりが重要である。そのためには、教師が、保育を実践するために必要な能力を現場にて身に付けられる OJT と最新の情報や知識を得たり様々な研修会に参加したりする研修 OFF-JT をバランスよく取れ入れた研修を行うことで、保育の質の向上につながるのではないかと考える。

本研究では学び続ける教師の姿勢が幼児の豊かな遊びにつながると考え、園内研修の在り方を見直し、幼児の豊かな遊びを追究していく。

2　研究のねらい

幼児の遊びは、教師との関わりで大きく変化する。限られた人員、勤務時間の中で、保育を実践しながら園内研修(OJT・OFF-JT)を工夫し、職場に学び続ける風土をつくりながら教師の資質を向上させることで、幼児の豊かな遊びを追究する。

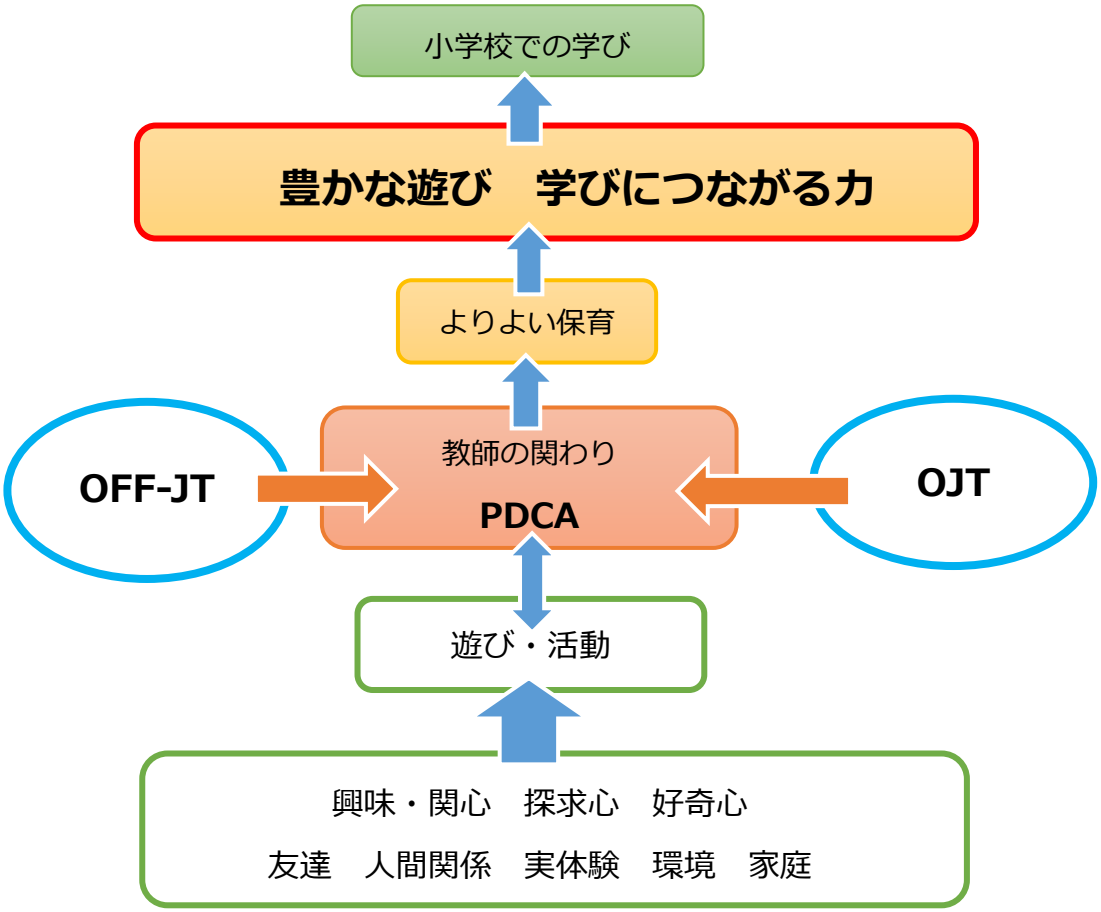
3　研究の内容

（１） アンケートを実施し、保育に関する実態の分析
（２） 「10 の姿」を通した年間指導計画の見直し (保育のねらいの再確認)
（３） 園内研修(OJT・OFF-JT)の計画・実践と記録・分析
（４） 保育マニュアル案の作成
（５） 成果を確認するための検証・考察
（６） 次年度の研修構想

4　研究の計画

（１） 園内研修の構想検討（前年度）
（２） 実態調査アンケートの実施（前年度）・集計と分析
　ア　市内幼稚園教諭と支援員・本園保護者・中学校区内小学校 1 学年担任教諭へのアンケート
（３） 園内研修計画立案・成果の検証方法検討
（４） 「10 の姿」年間指導計画の見直し
（５） OJT と OFF-JT の実践・振り返り・記録
（６） 振り返りを通し、OJT と OFF-JT の関連や系統性を整理
（７） 保育マニュアル案の作成・検討・修正
（８） 検証・評価・次年度の研究構想

5　研究の全体構想



6　1 年次の成果と今後の課題

○　保育の中にある具体的なテーマを OFF-JT による討論形式の研修で実施したことで、具体的な保育の場面をイメージしやすく、また、全員が発言しやすい雰囲気となり活発的な話合いができるようになった。

○　OJT では、教頭・主任が担任にインタビューする形式により、保育を振り返ることで、幼児の姿・言葉・行動を情報共有し、保育について理解を深めることができた。また、研修を通し、教師の関わり方が変わったことにより、幼児が自分の思いや考えを表し、遊びのアイデアを出すようになってきた。

○「10 の姿」を意識して保育活動の展開や週案作成・計画を立てるようになった。

○　研修の成果と課題をより具体的に分析するためのデータを収集し、教師の関わりが豊かな遊びにつなげられているかさらに追究していく。

○　小規模園における研修の仕方の工夫を図っていく必要がある。

Ⅳ 令和５年度幼稚園教育理解推進事業
茨城県協議会研究成果の要旨

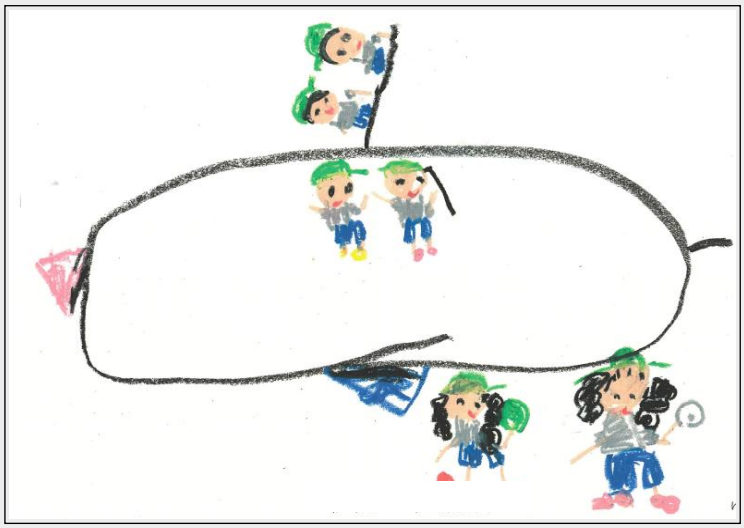
＜共通協議主題＞

「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論等を踏まえ、幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について

＜協議主題２＞

指導計画の作成、保育の展開、指導の過程の評価・改善について

☆　幼児教育教育課程研究協議会の参加者から寄せられたレポートから、実践のポイントを紹介します。



「うんどうかい　りれーがんばった！」
ひたちなか市立つだ保育所　　５歳児

「ちょうちょとおやま」
社会福祉法人葛城福祉会かつらぎ保育園　　５歳児

（共通協議主題）
「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論等を踏まえ、幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について

協議の視点①

幼児教育施設と小学校の先生方が、それぞれの保育・教育への理解を深め、架け橋期のカリキュラムを協働して作成するためには、どのようにしていけばよいか。

実践１：地域環境を幼小接続に生かす

ねらい

本園のある地域では、市の地域交流センターを中心に地域と園・学校の連携が充実していて、地域の代表と小・中学校、民生委員、警察等による地域協議会や、小・中学校の学校運営協議会（コミュニティ・スクール）に園長が出席している。

地域や小・中学校に対して、幼児教育への理解を深める取組を推進することで、幼小の円滑な接続を進めるとともに、地域の教育力や教育環境の向上につなげていきたい。

ここがポイント！

1　園と地域・小学校との情報交換

（1）学校評議員（小学校長、地域の人々など）に定期的に保育参観と協議に参加してもらう。

（2）小学校職員に保育参観してもらう。（計画訪問時など）

2　地域や小学校との交流

（1）地域交流センターの行事に参加し、地域の人々に発表を見てもらう。

（2）小学校の校庭でたこあげを行い、先生方や小学生と親しくなる。

（3）地域の人々や小学校に、自分たちが育てた花をプレゼントする。

（4）地域の道路に置くプランターの花植えや手入れを地域の人々と一緒に行う。

成果と課題

1　情報発信により、学校評議員の方々に「遊びを通しての育ちや学び」や「10 の姿」などについて、幼児たちの生きた姿を通して伝えることができた。学校評議員の方々を通して、地域に幼児教育の意義や価値についての理解が広がってきた。

2　小学校の職員との交流の中で、幼児の「学びの芽生え」や幼小の学びのつながりについての情報交換ができた。

3　地域交流により幼児の生活体験が豊かになり、様々な育ちにつながっている。また、幼児の活動が地域活動の活性化に生かされている面もあり、互いに有意義な取組になっている。

プラス！

小・中学校のコミュニティ・スクールの取組の中に幼小接続も含めてもらえれば、幼小の円滑な接続が進むだけでなく、さらに地域の教育力向上にもつながると考えられます。

実践２　小学校との情報交換・協議を実施する

ねらい

本園は私立であることから、公立小学校との連携を進めにくい状況にあったが、相互に理解を深め連携を進めるために、小学校と情報交換や協議（「架け橋タイム」）を行った。

ここがポイント！

1　「架け橋タイム」は７・９・10 月に小学校で実施。互いに教頭・主任・担任が参加し、園の５歳児の「すごろく作り」の事例記録をもとに協議した。

2　「架け橋タイム」で園の参加者が気付いたことは次の３点だった。

(1)　幼児が試行錯誤しながら遊んだり、やりたいことを見付けたりすることが、小学校での学習における探究心につながっていて、園の遊びは学習の素地である。

(2) 園での「思考力の芽生え」や「言葉による伝え合い」の育ちや学びが、小学校の授業につながる。

(3) 小学校では、教科のカリキュラムや時間の制限があることや、学年内の学級が足並みを揃えることを大切にしている。

3　園の保育を小学校教育とのつながりで捉え直し、次の４点を確認し、ねらいを明確にして保育実践に生かした。

(1)　幼児が自分の思いや考えを話すだけでなく、相手の話を聞いて自分との相違に触れたり気付いたりできるように援助する。

(2) 試行錯誤しながら集中して遊んだり、数か月遊び続けたりする姿を見守り、「課題を見付ける」という学習の素地を大切にする。

(3) 遊びや活動をできるだけ幼児に任せ、集中して遊んだり話し合ったりできるようにして、幼児の意欲を高める。

(4) 保育者は幼児のつぶやきなどから、遊びのヒントを一緒に考えたり試したりする。また、クラスで共通のイメージがもてるよう、読み聞かせや話合いの場を大切にする。

成果と課題

1　「架け橋タイム」を通して幼小が互いの保育・教育への理解を深めるだけでなく、学びのつながりに気付くことができた。

2　幼小接続のために相互参観や話合いを行う重要性を認識した。今後も継続して実施したい。

協議で出された意見（抜粋）

1　子供の発達や学びの連続性を確保するために、各園や学校としてこれから何に取り組むか。

(1) 互いの情報交換の場を設け、「３つの柱」や「10 の姿」の視点で話し合う。

(2) 幼小それぞれの教職員の間でも「学びの連続性」への認識の差があると感じる。幼小それぞれが管理職等のリーダーシップの下、研修等を実施して足並みをそろえることが大切だ。

(3) 幼児教育施設では「遊び込める」環境構成や援助に心がけ、小学校では「主体的な学び」ができるよう支援していく。幼小とも教師は子どもたちの可能性を信じて待ち、学びを引き出す関わりをすることが大切だ。

協議の視点②

幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）や参考資料（初版）等を踏まえ、子供の発達や学びの連続性を確保するために、各園や学校としてこれから何に取り組んでいく必要があるのか。

実践３：小学校との連携を幼児の「学びの芽生え」に生かす

ねらい

小学校と一体型である園の特徴を生かし、幼児が遊びや多様な経験を通して好奇心や探求心を育み、「遊び」から「学びの芽生え」へ発展させるための教師の関わりを、「ヤゴとのふれあい」の事例を通して考える。

ここがポイント！

1　５月、小学校からヤゴを分けてもらった。５年生児童を園に招いて、ヤゴについて幼児たちに話してもらった。５年生が自信をもって説明する姿が印象的だったのか、その後、ヤゴに興味をもって観察する幼児が増え、クラス全体にヤゴへの関心が広がった。小学生にとっても、自己肯定感を高める機会になったようだった。

2　ヤゴへの興味からエサのミミズなどの虫にも興味を広げ、友人や職員に質問したり図鑑を調べたりするようになった幼児、虫が苦手だったが少しずつヤゴの水槽に近づくようになった幼児などがいた。

3　幼児たちは、ヤゴへの興味と親しみを深めていき、ヤゴの様子をうれしそうに話した。その後無事に羽化させることができた。感動体験を共有し、クラスの仲間意識も向上した。

成果と課題

1　園と小学校が認識を共有しながら連携することで、幼小で学びをつなげることができた。ヤゴとの触れ合いを通して、幼児たちに「自立心」、「協同性」、「言葉による伝え合い」、「思考力の芽生え」などが育まれ、学びにつながった。

実践４：教師の援助の在り方を考え、遊びを主体的な学びへつなげる

ねらい

幼児の遊びを主体的な学びにつなげるために、教師の援助・関わり方のポイントについて、６月と７月の保育室の壁面の飾り作りの実践から考察した。

ここがポイント！

1　6月の実践から

(1)　６月の壁面にはアジサイがふさわしいと考え、教師が幼児たちに提示した。

(2)　保育室にアジサイの花と写真を掲示、いろいろな種類の紙を用意して、自由に作れるようにした。また、「花の作り方」の図を掲示し、教師が作成した手本を置いておいた。

(3)　教師の手本と同じようにアジサイの花を作ろうとして、苦戦する幼児がいた。作ることが楽しくて、どんどん進める幼児がいる一方、手が止まってしまう幼児がいた。

(4) アジサイの飾りができた後、「アジサイにかたつむり乗せたいな」とつぶやいた幼児がいた。教師がそれをクラスに伝えると、幼児たちは自由な発想で様々な作品を作り始め、のびのびと表現した。興味をもったことを考えたり調べたりしながら作る幼児もいた。

2 7月の実践から

(1) 教師が「今月の壁飾りどうしようか？」と声をかけると、幼児たちの話合いが始まり、「海の生き物」というテーマに決まった。

(2) 紙に限らず様々な材料を集め、幼児たちが自由に触れ、使えるようにした。お手本は示さず、幼児が試行錯誤する姿を見守り、作品が形になる喜びに共感した。必要な場合のみ最低限の援助をした。

(3) 友達の作品にも興味をもたせるよう声掛けをした。互いの思いを出し合い、イメージを共有して作っていた。

3 考察

(1) 6月は幼児の興味は高められたが、試行錯誤する楽しさ、挑戦意欲、満足感や達成感は十分味わえなかった。教師の思いや不安が強く出過ぎたことに気付いた。活動終了後に幼児のつぶやきに教師が気付き広げたことで、幼児の興味・関心が高まり、遊びの発展があった。

(2) 7月はスタートから幼児たちが自分で考え、材料を選び、作れるようにしたことで、わくわくした気持ちのまま、最後まで遊び込むことができた。思うように作れず悩みながらも、諦めずに何度も試す幼児や、友達と同じように作ろうとしたり友達と協力して作ったりする幼児がいた。
6月の活動では手が止まっていた幼児も、ほとんどが意欲をもって取り組んでいた。

成果と課題

1 教師の思いや不安はあっても、幼児たちが自ら方法を見出していけることを信じて環境を整え、関わっていくことが大切だと気付かされた。

2 幼児たちが本気で遊び込めるような場を設け、思いを引き出し生かす保育によって、達成感や満足感を味わえる経験を積み重ねていくことが、小学校教育へつながると感じた。

協議で出された意見（抜粋）

1 幼児教育施設と小学校の先生方が、それぞれの保育・教育への理解を深めるには。

(1) 授業・保育の参観や子ども同士の交流の機会を設け、幼小の教職員が互いに子どもへの関わり方の類似点・相違点や幼児と児童の学びに注目して観察する。

(2) 教職員の時間確保のためにＩＣＴを使って交流する。

2 架け橋期のカリキュラムを協働して作成するには。

(1) 相互理解と情報交換の場を計画的に設定し、継続的に協議する体制をつくる。教職員の人事異動で再構築が必要になることが多いので、適切に引き継ぎを行う。

(2) 幼小が合同で体験活動を実施し、互いの「学び」への理解を深める。

(3) 幼小どちらも連携を推進する立場であることを認識し、互いに頼ったり遠慮したりしない。

3 課題

(1) 小学校の学区に多くの幼児教育施設があり、連携・協力の体制づくりが難しい。市町村の役割を期待したい。（一つの幼児教育施設から、いくつもの小学校に就学することも含む）

（協議主題２）
指導計画の作成、保育の展開、指導の過程の評価・改善について

協議の視点①

幼児の発達に即して一人一人の幼児が幼児期にふさわしい生活を展開し、必要な体験を得られるように指導計画を作成するには、どのような工夫が必要か。

実践１：「育みたい資質・能力」や「10の姿」の視点で指導計画等を評価し改善する

ねらい

教育課程や指導計画、週案を改善することで、幼児の発達を的確にとらえ、適切に援助する。

ここがポイント！

1　週案の「期・月のねらい」を「育みたい資質・能力」や「10の姿」を考慮したキーワードを意識して見直した。「ねらい・内容」の欄には「育みたい資質・能力」の視点を色別のアンダーラインを引いて意識しやすくした。（資料１）

２週間を見通した指導計画　（６月１週～２週）　（６月５日～１６日）　４歳児　すみれ組

期のねらい	月のねらい
○友達と一緒に体を動かして遊ぶ喜びを感じる。（健） ○自分のことは自分でしようとする。（健） ○先生や友達に親しみをもって、関わろうとする。（人） ○友達と繰り返し取り組む楽しさを感じる。（人） ○身近な動植物に興味や関心をもつ。（環） ○身近な環境に親しみ、興味をもって繰り返し関わろうとする。（環） ○遊びの中で必要な言葉が分かり、使おうとする。（言） ○友達とイメージを共有して遊ぶ楽しさを感じる。（言）	○様々な活動を通して自分の健康に関心をもつ。 ○必要な言葉が分かり、使おうとする。

幼　児　の　姿

・自分のやりたい遊びを見付け、イメージに合うように環境を自分たちで構成したり、必要な物を用意したりして遊びを楽しんでいる。
・やるべきことが分かり、活動の準備や片付けを自分で進んで行っている幼児がいる一方で、声掛けが必要な幼児もいる。
・友達を誘ったり、話し掛けたりして、関わり合いながら遊びを楽しんでいる。
・今日遊んでいた物や作った物を取っておいたり、ロッカーにしまっておいたりして、明日も遊ぼうという気持ちをもっている。

○　ね　ら　い　　・　内　容

○様々な活動を通して、健康な生活の仕方を知る。（健）
・活動の中で様々な物を作ったり、作った物を使って遊んだりする。
・健康な生活リズムを身に付ける。
・先生や友達と一緒に食事をすることの楽しさを感じる。
・給食を食べたり、野菜を栽培したりすることで、食材に興味をもち、食べ物を大切にしようとする。
○自分なりに考えたことを相手に言葉で伝えようとする。（言）
・親しみをもって日常の挨拶をする。
・やりたいと思ったことを言葉で伝えたり、分からないことを尋ねたりする。
・考えを自分の言葉で表現し、伝わることや共感してもらうことの喜びを感じる。
・絵本や物語に親しみをもち、言葉の楽しさや美しさに触れる。

知識及び技能の基礎　　思考力・判断力・表現力の基礎　　学びに向かう力、人間性等

□　環　境　の　構　成　と　援　助

○様々な活動を通して、健康な生活の仕方を知るために
□様々な遊びをやってみようと思えるように、一人一人の思いを受け止め、遊びたくなる雰囲気をつくっていく。
□教師や友達と関わりながら遊びを広げていけるように、教師も遊びに参加する中で幼児の発想を引き出し、幼児の思いや願いを実現するために必要な材料を用意していく。また、自分たちで作ったという満足感を感じられるようにしていく。

＜資料１：６月１・２週の週案の抜粋＞

3　週案と保育実践については、写真記録を用いて振り返り、評価・改善した。（資料２）

○自分なりに考えたことを相手に言葉で伝えようとする。（言）

・進級当初に比べ、挨拶ができる幼児がとても多くなった。自分から教師や友達に挨拶をする姿も見られるようになった。

・活動を進める中で、自分の思っているとおりにいかなかったり、気持ちをうまく伝えられなかったりする様子が見られた。自分の力だけで相手に気持ちを伝えることが難しいが、教師に仲立ちをしてもらいながら自分の思いを話そうとしていた。

反省・評価	活動の準備や片付けなどをする際の個人差が大きいため、一人一人の生活リズムに合わせ、十分な時間を設けるなどの関わりが大切だと感じた。様々な関わり方を試して、幼児が進んで活動に取り組めるきっかけや方法を見付けていきたいと思う。 自分の思っていることや友達に言いたいことを教師に伝えている幼児がいるため、、必要であれば幼児同士の間を取り持ちながら、自分の言葉で友達に思いを伝えられるような関わりをしていきたい。

＜資料２：週の振り返り資料の抜粋＞

成果と課題

1　週案に期や月のねらいを記載したことで、教育課程や年間指導計画と関連づけて週のねらいや内容を設定することができるようになった。

2　「育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識しながら具体化したねらい・内容を設定することができた。また、職員が共通理解のもとで指導方法を工夫し、保育を展開できた。

協議で出された意見（抜粋）

1　指導計画の作成については、園全体や学年で共通理解しながら取り組むことを大切にしている。保育終了後の時間や曜日を決めての協議の場を設けている。

2　指導計画の作成は、幼児の実態を把握することが土台となる。職員間の情報交換が重要と考え、実践している。

協議の視点②
具体的なねらい及び内容を設定し、適切な環境を構成するに当たって、どのようなことを考慮する必要があるのか。

実践２：視点を明確にして協議し、指導計画の作成と評価・改善に生かす

ねらい

遊びの見取りと幼児理解に基づいた指導計画の作成と評価・改善のために、園内研修で協議を深める工夫を行った。

ここがポイント！

1　園内研修で、保育について視点を明確にして協議した。（例「スライム遊び」３歳児）

視点１　幼児の経験や興味…つぶやき・会話・表情・行動から考える。

・扱い方によって素材の形が変化していくことに気付いている。
・スライムの感触を楽しんでいる。　　・小さくちぎって数を数えている。

視点２　幼児の学び・育ち…「10の姿」から考える。

・感じたことを保育者に伝えている。＜言葉による伝え合い＞
・さまざまな素材に触れている。＜豊かな感性と表現＞
・ちぎって数を数えている。＜数量への関心＞
・素材の変化に気付いている。＜思考力の芽生え＞

視点３　保育者の援助・環境構成…行った援助・環境構成を振り返る。

＜☆保育者の願い、〇行った援助・環境構成、◇考えられる援助・環境構成＞
☆保育者や友達とのやり取りを楽しんでほしい。
〇発想が広がるよう様々な色のスライムを用意した。
〇作ったものを他の幼児と伝え合うようにさせた。
◇違う色を混ぜてみるよう助言した。

視点４　環境の再構成…保育者の願い、次回の援助・環境構成を考える。

☆遊びがより広がり、もっと楽しめるように。また思いを相手に伝えられるようにしたい。

成果と課題

1　協議の視点を明確にすることで、幼児の学び・育ちを的確に捉え、必要な援助と環境構成を考えることができた。
2　協議を通して他の保育者の見取り方を知り、多面的に幼児を理解することができた。

協議で出された意見（抜粋）

1　実態把握を的確に行い、ねらいや内容を教師が共通理解して保育に臨む。ねらいを踏まえて環境構成を考える。幼児に「何だろう？」と思わせる構成が望ましい。
2　環境構成で教師がどこまで準備・援助するかが重要。幼児の可能性を信じ、主体性を生かすこと、幼児同士のつながりを作ることを心がける。また、クールダウンの場を設けるなど特別な支援を要する幼児への配慮も欠かせない。
3　教師は遊びの展開や幼児の変容を見取り、記録を基に環境の再構成を考える。「どうしたら幼児が遊び込めるか」を常に心がける。

協議の視点③
幼児が望ましい方向に向かって自ら活動を展開していくことができるよう、先生はどのような姿勢で援助する必要があるのか。

実践３：遊びの振り返りを工夫し、幼児の主体的な学びを引き出す

ねらい

興味のある遊びには自ら関わり遊ぶことができるが、困難なことには取り組もうとしなかったり、すぐ諦めたりする傾向がある幼児たちが、自ら考え工夫し友達と試行錯誤し、諦めずに取り組めるような保育を考え実践した。

ここがポイント！

1　保育の記録を教師が共有し、幼児が諦めずに活動に取り組めるような教師の関わり方や環境構成などを話し合った。幼児の活動の実態把握を行い、環境を再構成した。

2　ホワイトボードや掲示物を活用して話合いや振り返りを可視化した。

（例　「温かい泡風呂を作ろう」　５歳児）

(1) 砂場に穴を掘って水を入れ、泡風呂を作る幼児たちがいた。幼児たちから「泡風呂を温かくしたい。どうやったら温まるかな？」と疑問が出た。教師は幼児たちの意見をホワイトボードに書き出しながら話合いを援助した。

(2) いくつかアイデアは出たが、泡風呂は思うようには温まらず、数日で興味が薄れてしまった。教師は、それまでの泡風呂作りの様子を、掲示物「気づきの木」にまとめ保育室に掲示した。

(3) それまで泡風呂作りに参加しなかった数人の幼児が「気づきの木」に興味を示し、新しいアイデアが出された。アイデアが実り、次第に泡風呂は温かくなっていった。

(4) その様子を見て、一度は諦めた幼児たちが泡風呂作りに戻ってきた。みんなの協力で温かい泡風呂が完成した。

＜掲示物「気づきの木」＞

成果と課題

1　一度は遊びへの興味が薄れてしまったが、振り返りを可視化するなどの援助で他の幼児たちに遊びが広がり、遊びが継続できた。

2　教師が幼児たちの姿を共有し話し合って適切な援助を考えたり、幼児の実態から環境を再構成したりすることで、興味を高めることができた。

協議で出された意見（抜粋）

1　教師は幼児と一緒に遊びながら、出しゃばらないように心がけている。幼児たちに「どうしたいのか」自分たちで考えていけるよう、まずは幼児たちに意見を聞いたり、様々なヒントを出して話し合うよう援助したりしている。

2　失敗も大事な経験と考え、見守ることを基本にしている。その方が幼児にとって満足感や達成感を得られている。

3　遊びの振り返りの時間を大切にしている。写真やホワイトボードを使うなどして視覚で捉えられるようにして、幼児の気付きを促している。

4　幼児同士の話合いでは、教師がモデルを示したり、発言を援助したりして、一人一人の幼児が自信をもてるようにしている。

協議の視点④
幼児の実態等に即して指導の過程についての評価を適切に行い、指導の改善を行うためには、どのような工夫が必要か。

実践４：ポートフォリオやビデオ・付箋を活用して情報共有・評価し指導過程を改善する

ねらい

本園では特別な配慮を必要とする幼児が年々増加し、教師の他に支援員も多く配置されている。幼児一人一人の実態に即して指導過程を改善するため、また、職員同士や職員と保護者及び関係機関との連携を進めるために、評価や記録について園全体で工夫した。

ここがポイント！

1　幼児の活動・遊びの様子を写真入りで記録したポートフォリオを作成し、昇降口に掲示した。
2　幼児の姿と教職員の援助をメモや映像で記録して、園内研修・ビデオカンファレンスや日常の話合い等で共有した。幼児の会話・つぶやきと教師の援助、幼児同士の関係などに注目して記録した。
3　教師や支援員などが気になった幼児の言葉・表情・会話の様子等を付箋にメモし職員室のボードに掲示し、共有した。

成果と課題

1　ポートフォリオを作成し掲示したことで、幼児たちは互いに相手の活動・遊びに興味をもち、自然に対話が生まれたり、友達の新しい面に気付いたりした。教職員は、写真から幼児を多面的に深く見取る習慣がつき、遊びを広げ深めるための準備が適切に行えるようになった。また、教職員同士で情報を共有することで、振り返りが深まり、指導の改善につながった。
2　園内研修などで援助の在り方をみんなで考える体制が確立し、多様な見方考え方に触れ、幼児の姿を捉え直したり自身の保育観を見直したりできた。指導の改善だけでなく教職員同士の信頼関係も深まった。
3　付箋を利用した記録を行うことで、教職員がより丁寧に幼児の様子を見取るようになった。また、勤務形態の異なる教職員も情報を共有でき、必要な援助が協力してできた。

実践５：ＩＣＴを活用して指導の改善に生かす

ねらい

ＩＣＴを活用することで、保育を様々な視点から見直し、幼児の見取りや援助の在り方や環境構成などを改善した。また、幼児が探求心を膨らませ遊びを充実させることにＩＣＴをどのように活用できるか探った。

ここがポイント！

1　「園内支援システム」を使い、各担任が毎日の保育での幼児の遊びや活動の様子を写真とエピソードで記録した。電子記録であることを生かして、幼児の名前や「10の姿」でタグ付けをすることで、記録を振り返りやすくした。また、学期末には、日々の記録から捉えた幼児一人一人の育ちを幼児と保護者に伝えて形成的評価とした。

2　保育の様子を映像で記録し、全職員で視聴してよさや課題を洗い出し、よりよい環境構成や援助の在り方について話し合った。

3　幼児の援助にタブレットを活用した事例

４歳児クラスでは、多くの幼児に「ファイヤーダンス」が大人気の遊びとなっていた。１ヶ月ほど経つとファイヤー踊りで遊ぶ幼児が少なくなった。

教師がタブッレトＰＣで本物のファイヤーダンスの動画を見せたところ、多くの幼児が再び興味をもち、動画のポーズを真似したり自分たちで新しいポーズや動きを考えたりして「ファイヤーダンス」がより深まっていった。

成果と課題

1　ＩＣＴを利用して記録を積み重ねることで、遊びの変化や友達との関わり方などを振り返り、幼児の育ちを的確に捉えることができて、保育の改善ができた。「10の姿」のタグ付けで振り返ることで、様々な視点から幼児の姿や育ちを見ることができた。

学期末に成長を幼児・保護者と共有したことで、幼児は自信と意欲を高めていた。

2　園内研修で、映像記録をもとに意見交換することで、見えていなかった幼児の姿に気付いたり自身の課題を考えたりできた。保育の改善や指導計画の改善につながった。

3　保育にＩＣＴを活用して形成的評価をすることで、幼児が知りたい情報が得られ、イメージが膨らみ、遊びの意欲につなげることができた。

協議で出された意見（抜粋）

1　指導の過程の評価を適切に行うためには記録が重要である。記録の残し方について教職員が共通理解すること、ＩＣＴやビデオなどの機器を利用するなどしている。

2　記録は教職員同士・保護者・関係機関と共有することが重要である。

Ⅴ 資 料

- 家庭教育応援ナビ「すくすく育て　いばらきっ子」
- アプローチカリキュラム作成のポイント
- スタートカリキュラム作成のポイント（入学式から１週間）
- 茨城県保幼小接続カリキュラム
- 幼児教育関係資料一覧
- 県主催研修に係る欠席届及び連絡・提出先
- 「茨城の幼児教育第４９号」作成協力者

「たのしいゆめのまち」
鉾田市立鉾田北小学校　１年

「大きなマグロ」
境町立森戸小学校　１年

家庭教育応援ナビ「すくすく育て いばらきっ子」

茨城県教育委員会では、「家庭教育応援ナビ」を開設し、子育てに役立つマンガや動画をはじめ、家庭教育コラムや子育て相談Q&A、子育てアドバイスブックなど、ご自身の研修や保護者への情報提供に役立つコンテンツを掲載しています。

また、幼児教育関係研修情報や動画・資料・教材のコンテンツを随時更新し、幼児教育に携わる方々への情報提供に努めております。

保護者向けの資料やお便りの記事としてもお使いいただけます。ぜひ、ご活用ください。

応援ナビトップページ

「家庭教育応援ナビ」で検索！

https://www.edu.pref.ibaraki.jp/katei/

◆ コンテンツ紹介 ◆

①子育てに役立つマンガ・動画・資料
②子育て相談Ｑ＆Ａ
③家庭教育コラム
④おすすめの本紹介
⑤子育てに関する相談窓口
⑥イベント・講座情報
⑦家庭教育支援資料モバイル版
⑧家庭教育支援資料ＰＤＦ版
⑨子育てアドバイスブック外国語版
⑩家庭教育支援活動サークル・団体情報
⑪幼児教育関係研修情報
⑫研修資料・教材
⑬企業連携による教育力向上推進の取組
⑭ツイッター

研修関係コンテンツ

⑪幼児教育関係研修情報

○下記の課の主催する研修情報を一覧表から確認することができます。

- 生涯学習課
- 義務教育課
- 子ども未来課

○研修名をクリックすると、開催要項や申込用紙を閲覧、ダウンロードできます。

⑫研修資料・教材

○左記の研修で使う動画や資料、保育や授業、園内・校内研修、家庭教育学級等で活用できる教材や資料を掲載しています。

▶「動画・資料」
- 研修や講演会の講義動画

▶「教材・資料」
- 茨城県保幼小接続カリキュラム
- 保幼小連携・接続実践事例集　等

【問合せ先】
茨城県教育庁総務企画部生涯学習課
就学前教育・家庭教育推進室
TEL029-301-5132

幼児教育関係資料一覧

＜政府等刊行物＞

資料名、発行年月等	解　　説
①　幼稚園教育要領 平成 29 年３月　文部科学省	幼稚園で教育課程を編成する際の基準として、国が示したものである。
②　幼稚園教育要領解説 平成 30 年３月　文部科学省	幼稚園教育要領について具体的に解説をしている。幼稚園教育要領の改訂の基になった考え方や幼稚園教育の基本を示した教育要領に関する最も基本的な参考資料である。
③　幼保連携型認定こども園教育・保育要領 平成 29 年３月　内閣府　文部科学省　厚生労働省	幼保連携型認定こども園で教育・保育課程を編成する際の基準として、国が示したものである。
④　幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 平成 30 年３月　内閣府　文部科学省　厚生労働省	幼保連携型認定こども園教育・保育要領について具体的に解説をしている。幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂の基になった考え方や園教育の基本を示した教育・保育要領に関する最も基本的な参考資料である。
⑤　幼稚園教育指導資料　第１集 「指導計画の作成と保育の展開」 平成 25 年７月改定　文部科学省（フレーベル館）	指導計画作成に当たっての基本的な考え方、指導計画の作成の具体的な手順とポイントを示すとともに、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続や指導計画の評価・改善のポイントなどについて実践事例を取り上げて解説している。
⑥　幼稚園教育指導資料　第２集 「家庭との連携を図るために」 平成４年７月　文部省（世界文化社）	幼稚園と家庭とが連携して相互の教育機能を高め合いながら幼児の発達を促していくための基本的な考え方や方法などについて、実践事例を取り上げて解説している。
⑦　幼稚園教育指導資料　第３集「幼児理解と評価」 平成 22 年７月改定　文部科学省（ぎょうせい）	幼稚園教育における幼児理解と評価の意味、幼児理解に必要な教師の姿勢と方法、記録の方法、指導要録の記入などについて述べているほか、創意工夫して適切な幼児理解と評価を進めていった実践事例を紹介している。
⑧　幼稚園教育指導資料　第４集 「一人一人に応じる指導」 平成７年４月　文部科学省（フレーベル館）	幼稚園教育の課題と教師の専門性について考えるとともに、一人一人に応じるための教師の基本姿勢や指導の実際について、事例を基に解説している。
⑨「幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集」 平成 13 年３月　文部科学省（ひかりのくに）	幼児の道徳性の発達についての基本的な考え方や具体的な事例を通して、道徳性の芽生えにつながる幼児の姿と教師の関わりについて、幅広い角度から述べられている。
⑩「幼児期から児童期への教育」 平成 17 年２月 国立教育政策研究所教育課程研究センター （ひかりのくに）	幼児期から児童期の教育を考える際の基本的な事項、幼稚園教育に期待されること、幼児期から児童期への教育を豊かにする視点のほか、発達の時期の特徴をとらえた実践事例を通じて、幼児理解、環境の構成や教材、教師の援助について解説している。
⑪「幼稚園における子育て支援活動及び預かり保育事例集」 平成 21 年３月　文部科学省	少子化や都市化、男女共同参画の進展や核家族化によって、多くの幼稚園で行われている子育て支援や預かり保育の事例を取りまとめたもの。
⑫「保育所や幼稚園等と小学校における連携事例集」 平成 21 年３月　文部科学省　厚生労働省	「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」に盛り込まれた小学校との連携の推進をする上で、参考となる事例を取りまとめたもの。
⑬「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」　平成 22 年 11 月 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議	子供の発達や学びの連続性を保障するため幼児期の教育と児童期の教育が円滑に接続できるよう幼小接続における教育課程編成、指導計画作成上の留意点や幼小接続の取組を進めるための方策をまとめたもの。
⑭　幼児期運動指針ガイドブック 「毎日楽しく体を動かすために」 平成 25 年２月　文部科学省（サンライフ企画）	幼児期に必要な多様な動きの獲得や体力・運動能力の基礎を培い、様々な活動への意欲や社会性、創造性などを育むために、子供の発達段階に応じてどのような運動をさせ、どんな能力を身につけさせればよいのかという目安を示し、その具体的な方法を例示したもの。
⑮　発達や学びをつなぐスタートカリキュラム －スタートカリキュラム導入・実践の手引き－ 平成 30 年３月 文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター	新しい小学校学習指導要領の理念の実現に加え、スタートカリキュラムの取組を学校全体として一層充実させていくことを目的として、この手引きが新たに作られた。本手引きには、各学校が抱える様々な実態に対応できるよう、スタートカリキュラムを実際に編成・実施していくために必要な具体的な手順、事例等を盛り込んでいる。

⑯　幼児理解に基づいた評価 平成31年３月　文部科学省　（チャイルド本社）	一人一人の幼児を理解し、適切な評価に基づいて保育を改善していくための基本的な考え方や方法について、実践事例を取り上げながら解説している。
⑰　幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開 令和３年２月　文部科学省（チャイルド本社）	教育課程に基づいて幼児の発達の実情に照らし合わせながら、一人一人の幼児が生活を通して必要な経験が得られるような具体的な指導計画を作成するための基本的な考え方や方法などについて解説している。
⑱　指導と評価に生かす記録 令和３年10月　文部科学省（チャイルド本社）	教師の専門性を高めるための記録の在り方や、その記録を実際の指導や評価にどのように生かしていくのかなどについて実践事例を取り上げて解説している。

＜映像教材（ＤＶＤ）＞

タイトル、対象学年等	解　　説
①　幼児理解に始まる保育① 「３歳児の世界」 ３歳児　23分　平成14年 文部科学省初等中等教育局幼児教育課監修 岩波映像株式会社	入園当初の自分中心な３歳児が様々な出来事と出会う場面で、幼児が何を求めているのか戸惑う新任の先生の姿をとらえている。〈ひとりじめしたいの？それとも思いやり？〉〈友だちってなあに？友だちと一緒って楽しい？〉〈一人一人のこだわりにどこまでつきあうの？〉〈一人一人のリズムと園生活〉の４場面。
②　幼児理解に始まる保育② 「せんせいだいすき」 ４歳児　20分　平成15年 文部科学省初等中等教育局幼児教育課監修 岩波映像株式会社	幼児の表情や言葉、動きなどから、幼児の思いや願いを捉え、幼児理解を深める教材として編集されている。〈アカリちゃんありがとう〉〈甘えたいの？それとも……〉〈お靴をとりにいくだけ？〉〈先にいただきますしてていいからね〉の４場面。
③　幼児理解に始まる保育③ 「ぎゅうにゅうできたよ ー子供の思い・先生の願いー」 ４歳児　22分　平成16年 文部科学省初等中等教育局幼児教育課監修 岩波映像株式会社	保育記録を書きながら、子供の思いと自分の願いのずれに気付く先生の姿が描かれる。〈メガネつくろうよ〉〈みんなできれいにしよう〉〈みんなの顔をかいてほしいんだけど〉〈修理してたの？〉の４場面。
④　幼児理解に始まる保育④ 「友だちと出会う」 ４歳児　22分　平成17年 文部科学省初等中等教育局幼児教育課監修 岩波映像株式会社	一人一人がイメージを出しながら一緒に遊びを楽しむためにはどのような関わりが必要なのか。〈６まいもってるすごいだろう〉〈かわいいひとははいれない〉〈やろかふたりで〉〈みどりのぬまつくってみる〉の４場面。
⑤　幼児理解に始まる保育⑤ 「いっしょにやろうよ～伝え合う気持ち･５歳児」 ５歳児　35分　平成18年 文部科学省初等中等教育局幼児教育課監修 岩波映像株式会社	一人一人の思いに教師はどう応じ、どのようにつなげていけばよいのか。教師の関わりが幼児の言動にどのような変化をもたらしているのか考えることができる。〈子供会で人形劇をしよう〉〈遠足バスはどこにいくの〉〈お客さんをよんできたら〉〈どうしてハルカちゃんやらないの〉の４場面。
⑥　幼児とのかかわりを考えるＡ 「新しい先生とともに」 ４歳児　20分　平成４年 「はじめての幼稚園」 ４歳児　21分　平成５年 「こんなことがおこったら」 ４歳児　22分　平成６年 「新しい生活がはじまって」 ３歳児　20分　平成７年 文部省初等中等教育局幼稚園課監修 岩波映像株式会社	「新しい先生とともに」 新任の先生が園生活の中で幼児との関わりに戸惑う場面を通して、幼児理解の在り方を考えていく。保育の中での教師の指導の実際について、様々な観点から話合いの資料とすることができる教材である。 「はじめての幼稚園」 登園、かたづけ、お弁当など、毎日の園生活での幼児の思いにふれながら、その指導の在り方を考えていく。保育の中でよく起こると思われる場面を取り上げて活用しやすいようになっている。 「こんなことがおこったら」 園生活で起こる様々な出来事は、いずれも幼児の発達に関わる大切な場面である。生活の中で育つ姿やそのための援助を考えていく。それぞれの場面に自分自身が直面したと想定して、どうしたらよいかを考える上で参考となる。 「新しい生活がはじまって」 新しい園生活がはじまって戸惑う幼児の姿から、幼児とともに園生活のリズムをつくり出すことを考えていく。教師のどのような関わりが幼児のどのような行動を生み出しているのか考える上で参考となる。

⑦　幼児とのかかわりを考えるＢ 「せんせい、見てて」 ４歳児　20 分　平成８年 「だって、やりたいんだもん」 ４歳児　20 分　平成９年 「せんせいは、トオルくんとつきあってるんだよ」 ４歳児　22 分　平成 10 年 文部省初等中等教育局幼稚園課監修 岩波映像株式会社	「せんせい、見てて」 一人一人に応じていくためには、幼児一人一人のやっていることに温かな関心を寄せ、その思いを受け止めていく必要がある。二人の幼児との関わりを通して一人一人に応じる指導の在り方を考えていく。 「だって、やりたいんだもん」 幼児一人一人がその子らしさを発揮していくためには、温かな雰囲気のある学級を作ることが大切である。友達との出会いから始まる集団生活を考えていく。 「せんせいは、トオルくんとつきあってるんだよ」 幼児の話に最後まで耳を傾け行動を見守るという教師としての関わりは、幼児との信頼関係を築き、充実した園生活をつくり出すことにつながる。幼児が語りかける言葉からその心の揺れ動きを受け止め幼児との関わりを考える。
⑧　幼児とのかかわりを考えるＣ 「ふたりだったらチョーさみしそう」 ４歳児　24 分　平成 11 年 「ここだからねせんせい」 ５歳児　22 分　平成 12 年 「アリちゃんはアメリカへいっちゃったの ～３歳児・５月の生活」 ３歳児　21 分　平成 13 年 文部省初等中等教育局幼稚園課監修 岩波映像株式会社	「ふたりだったらチョーさみしそう」 幼児の主体的な活動は友達との関わりの中でより豊かになっていく。幼児一人一人の心を受け止め、幼児同士の関わりを深めながら、一人一人のよさを生かす指導の在り方を考えていく。 「ここだからねせんせい」 幼児の主体的な活動を促すためには、幼児一人一人の思いや願いを受け止め、それにそって教師が様々な役割を果たすことが必要である。教師と幼児とのやり取りから、幼児理解に基づく保育について考えていく。 「アリちゃんはアメリカへいっちゃったの」 園生活に慣れ、安定した気持ちをもつようになるためには、幼児一人一人の心の動きにそった教師の関わりが大切である。入園当初の 3 歳児が次第に安定していく姿から、幼児理解に基づく保育について考えていく。
⑨　３年間の保育記録 「よりどころをもとめて」 ３歳児前半　38 分 「やりたい　でも、できない」 ３歳児後半　35 分 平成 16 年 文部科学省特別選定 小田豊国研理事長・神長美津子教授/監修 岩波映像株式会社	「よりどころをもとめて」 入園から卒園まで一人の子供を通して幼児の発達と教育の実際を描くシリーズの１作目。初めて保護者と離れる不安を先生がどのように受け止めるか、入園から夏休みまでのリョウガくんと教師の関わりから考える。 「やりたい　でも、できない」 ３歳児の２学期、次第に先生や友達のしていることに興味をもち、自分の世界を広げていくが、やりたい気持ちが強くなるにつれ、うまくいかないこともでてくる。そんなとき、先生は子供たちをどのように支えるかを考える。
⑩　３年間の保育記録 「先生とともに」 ４歳児　46 分 「育ちあい学びあう生活の中で」 ５歳児　57 分 平成 17 年 文部科学省特別選定 小田豊国研理事長・神長美津子教授/監修 岩波映像株式会社	「先生とともに」 ４歳は友達との関係の中に自分の世界を広げていくが、心に葛藤を覚える時期でもある。幼児の心をほぐし動き出させるためには幼児の心に寄り添い支える保育者の存在が大切なことを伝えている。 「育ちあい学びあう生活の中で」 ５歳児はたくさんの友達に出会い、刺激を受け、時にはぶつかり合いながら育っていく。そうした子供同士の関係をつくっていくことが保育者の大切な役割であることを伝えている。
⑪　「年長さんがつくったおばけやしきー生活発表会に向けてー」 ５歳児　23 分　平成 15 年 文部科学省特別選定 岩波映像株式会社	５歳児 11 月の幼児が、先生や友達と一緒に生活発表会に向かう。幼児同士がぶっかり合ったりアイディアを出し合ったりしながら、互いに認め合って成長する姿。それを支える教師のかかわりが、幼児に活動する充実感を与え、行事や園生活をより魅力あるものとしていることを読み取ることができる。
⑫　「迷路ごっこだよー伝える喜びから伝えあう楽しさへー」 ５歳児　22 分　平成 13 年 文部科学省特別選定 岩波映像株式会社	５歳児 12 月の幼児たちと教師とのありのままの生活が映し出されている。教師の仲立ちによって、「伝わる喜び」から「伝えあう楽しさ」へと変容する幼児の姿を通して、コミュニケーションを育てる教師の関わりを考えていく。
⑬　「ごめんね、またこんどねー４歳児のゆれる心ー」 ４歳児　22 分　平成 16 年 文部科学省選定 日本映画新社	幼稚園の年中組にスポットをあて、遊びを通して友達との関わり方や思いやる気持ちを学んでゆく姿を紹介しながら、子供たちと関わる先生の想いや役割について考える。

⑭ 「やっぱりそうだよねー認めあう友達との生活・５歳児３学期」 ５歳児　36 分　平成 20 年 文部科学省特別選定 幼児教育映像制作委員会	幼稚園生活最後の生活発表会の準備を始める５歳児。どんな劇にするか、背景や衣装をどうするか。それまで学んだ経験を生かしながら友達と協力して活動を豊かに展開しようとする幼児たちの姿と、幼児同士の心のつながりのある温かい学級集団を育てようとする教師の姿が映し出されている。
⑮ 「ある認定こども園の挑戦ー環境がはぐくむ健やかな子どもの育ちー」 ０歳児～６歳児　90 分　平成 17 年 岩波映像株式会社	認定こども園での教育及び保育は「環境を通して行う」ことが基本である。０歳児から６歳児までの子供が安心して、心地よく生活できる環境、また子供の自発的な活動である遊びを保証する環境を求めて、子供と保育教諭そして保護者、ときには地域の方と創造する認定こども園の生活が描かれている。
⑯ 「保育所保育指針を映像に」 ０歳児～６歳児　121 分　平成 21 年 岩波映像株式会社	第１巻では子供の遊びや環境への関わり、友達や保育士とのやりとりに着目し、具体的な保育実践について考えていく。第２巻では保育所の社会的役割や責任を果たすことの重要性と地域社会に貢献していく必要性を伝えていく。
⑰ 「３.11 その時、保育園は”いのちをまもるいのちをつなぐ”」 検証編（60 分）証言編（124 分） 日本女子体育大学 天野珠路教授/監修 岩波映像株式会社	〈検証編〉 １避難先・避難ルートの確認　２地域との連携 ３保護者への連絡・伝達　４保育園の備蓄 ５保育の中の安全教育　６子どもの安全を考慮して ７社会的役割と使命 〈証言編〉被災した岩手県・宮城県・福島県 14 園からの声
⑱ 「希望をささえる－３.11 その時、保育園は”続編”」 日本女子体育大学 天野珠路教授/監修 岩波映像株式会社	１プロローグ・2 分　２子ども達の震災・9 分 ３保育を支えあう・7 分　４神戸の記憶・7 分 ５保育士の痛み・18 分　６放射能から子どもを守る・14 分 ７未来を紡ぐ保育園の再建・14 分
⑲ 幼児教育研修用ＤＶＤ（45 分） 「幼児教育から小学校教育へー１ねんせいになるってことはー」 ５歳児～小学１年生　平成 28 年 聖徳大学大学院　篠原孝子教授/監修・解説 幼児教育映像製作委員会	幼児教育と小学校教育では、生活の仕方、学び方など大きな違いがあり、双方の教育内容や指導方法等の理解が課題となっている。このＤＶＤは、一人の子供の５歳児３学期から小学校生活に適応するまでを連続して映像で記録している。幼児期に育みたい力とは何か、子供はどのような段差を感じるのか、小学校のスタートカリキュラムはどうあったらよいかなどを考えられるようになっている。
⑳ 「ある認定こども園の挑戦Ⅱー育ちあう保育」 ０～６歳児　85 分　平成 29 年 増田まゆみ教授・無藤隆教授/監修・解説 岩波映像株式会社	Ⅰ認定こども園さざなみの森誕生・17 分 Ⅱミニレクチャー（2018 年施行の各保育要領等のﾎﾟｲﾝﾄ） Ⅲ０、１、２歳児の保育・20 分 Ⅳ３、４、５歳児の保育・15 分 Ⅴ保護者、地域と共に創造する保育・9 分 Ⅵ保育者の育ち・12 分
㉑ 特別支援教育・保育ＤＶＤ（56 分） 「みんなで育てる　みんなで育つ～子どもの困難さに寄り添う保育～」 ４歳児　平成 30 年　文部科学省選定 聖徳大学 小田豊教授/監修 幼児教育映像制作委員会	子供たちの発達には個人差があり、特に幼児期は発達も著しく、障害があるといわれた子供でも、成長段階で症状が変化したり、周囲の大人たちの適切な関りで、気になる症状が改善されたりすることが多くある。このＤＶＤは、幼児一人一人の個性や困難さに正面から向き合う幼児期の特別支援教育の在り方を教えてくれている。
㉒「映像で見る　主体的な遊びで育つ子どもーあそんでぼくらは人間になるー」 大豆生田啓友・中坪史典/編著 エイデル研究所	保育に関わるあらゆる学習課題に応えることを目的に、映像とテキストにより構成されている。 映像には 15 シーンの保育実践が収録されており、テキストを使って研修できるように工夫されている。 例：「新入園の頃」、「コマに夢中」、「どろだんごの時間」等

＜本県の指導資料＞

年　度	指　導　資　料　等
昭和 44 年度	幼稚園教育指導事例集　第１集（自然編）
昭和 45 年度	幼稚園教育指導事例集　第２集（社会編）
昭和 46 年度	幼稚園教育指導事例集　第３集（健康編）
昭和 47 年度	幼稚園教育指導事例集　第４集（絵画製作編）
昭和 48 年度	幼稚園教育指導事例集　第５集（言語編）
昭和 49 年度	幼稚園教育指導事例集　第６集（音楽リズム編）
昭和 50 年度	茨城の幼稚園教育　第１号　教育制度の推移と茨城の幼稚園教育 幼稚園教育指導資料１　指導計画作成・改善のための手引き
昭和 51 年度	茨城の幼稚園教育　第２号　101 年目から幼稚園教育 幼稚園教育指導資料２　指導内容精選のための手引き
昭和 52 年度	茨城の幼稚園教育　第３号　幼小関連の教育 幼稚園教育指導資料３　指導の反省・評価のための手引き 幼稚園教育研究指定校研究収録（第１集）
昭和 53 年度	茨城の幼稚園教育　第４号　新規採用教員研修講座の実施をめぐって 幼稚園教育指導資料４　幼児理解のための手引き 幼稚園教育研究指定校研究収録（第２集）
昭和 54 年度	茨城の幼稚園教育　第５号　『心』を育てる教育 幼稚園教育指導資料５　指導法改善のための手引き 幼稚園教育研究指定校研究収録（第３集）
昭和 55 年度	茨城の幼稚園教育　第６号　教育課程の編成について 幼稚園教育指導資料６　幼小連携の教育を進めるための手引き 幼稚園教育研究指定校研究収録（第４集）
昭和 56 年度	茨城の幼稚園教育　第７号　総合的な指導の充実　－興味や欲求を生かして行う指導の在り方－ 幼稚園教育指導資料７　幼児の自発性を育てるための手引き 幼稚園教育研究指定校研究収録（第５集）
昭和 57 年度	茨城の幼稚園教育　第８号　総合的な指導の充実　－幼児の発達に即した指導－
昭和 58 年度	茨城の幼稚園教育　第９号　総合的な指導の充実　－幼児の育ちと環境教育－
昭和 59 年度	茨城の幼稚園教育　第 10 号　総合的な指導の充実　－家庭との連携を中心に－
昭和 60 年度	茨城の幼稚園教育　第 11 号　幼稚園教育の見直し
昭和 61 年度	茨城の幼稚園教育　第 12 号　幼稚園と家庭との連携に関する研究
昭和 62 年度	茨城の幼稚園教育　第 13 号　自然と触れ合いを図る指導の充実
昭和 63 年度	茨城の幼稚園教育　第 14 号　これからの幼稚園教育１　－楽しい園生活と環境とのかかわり－
平成元年度	茨城の幼稚園教育　第 15 号　これからの幼稚園教育２　－楽しい園生活と環境とのかかわり－
平成２年度	茨城の幼稚園教育　第 16 号　これからの幼稚園教育３　－楽しい園生活と環境とのかかわり－
平成３年度	茨城の幼稚園教育　第 17 号　幼稚園生活の中での教師の役割 幼稚園教育リーフレット１　幼児教育にふさわしい生活の展開
平成４年度	茨城の幼稚園教育　第 18 号　指導計画の作成と展開 幼稚園教育リーフレット２　家庭との連携
平成５年度	茨城の幼稚園教育　第 19 号　幼児の理解と評価 幼稚園教育リーフレット３　評価を生かして保育を見つめる

年　度	指　導　資　料　等
平成６年度	茨城の幼稚園教育　第 20 号　家庭や身近な社会とのかかわり 幼稚園教育リーフレット４　幼児期の発達を見通す
平成７年度	茨城の幼稚園教育　第 21 号　地域の中の園 幼稚園教育リーフレット５　一人一人に応じるために
平成８年度	茨城の幼稚園教育　第 22 号　カウンセリングマインドを生かして 幼稚園教育リーフレット６　幼児の心によりそうために
平成９年度	茨城の幼稚園教育　第 23 号　一人一人を大切に、集団のよさを加味しながら 幼稚園教育リーフレット７　少子時代における集団の役割を
平成 10 年度	茨城の幼稚園教育　第 24 号　障害のある幼児とともに 幼稚園教育リーフレット８　受け止めていますか、一人一人のよさを
平成 11 年度	茨城の幼稚園教育　第 25 号　今、幼稚園教育に求められるもの１　－教師の役割－ 幼稚園教育リーフレット９　今、幼稚園教育に求められるもの　－教師の役割－
平成 12 年度	茨城の幼稚園教育　第 26 号　今、幼稚園教育に求められるもの２　－幼稚園と小学校の接続のために－ 幼稚園教育リーフレット 10　幼稚園と小学校の接続のために
平成 13 年度	茨城の幼稚園教育　第 27 号　今、幼稚園教育に求められるもの３　－親育ちをともに考えて－
平成 14 年度	茨城の幼稚園教育　第 28 号　地域社会と共に歩む　－多様化時代の幼稚園－
平成 15 年度	茨城の幼稚園教育　第 29 号　幼稚園教員の資質向上のために１　－研修を通して学ぶ－
平成 16 年度	茨城の幼稚園教育　第 30 号　幼稚園教員の資質向上のために２　－研修を通して力をつける－
平成 17 年度	茨城の幼稚園教育　第 31 号　開かれた信頼される幼稚園を目指して　－学校評価の実践－
平成 18 年度	茨城の幼稚園教育　第 32 号　幼児期における道徳性の芽生えを培う リーフレット　幼児期から児童期への発達や学びの連続性を踏まえた連携・接続のために
平成 19 年度	茨城の幼稚園教育　第 33 号　幼保小連携教育を考える１
平成 20 年度	茨城の幼稚園教育　第 34 号　幼保小連携教育を考える２
平成 21 年度	茨城の幼稚園教育　第 35 号　幼稚園における子育て支援を考える
平成 22 年度	茨城の幼稚園教育　第 36 号　幼稚園における食育を考える
平成 23 年度	茨城の幼稚園教育　第 37 号　幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について考える
平成 24 年度	茨城の幼稚園教育　第 38 号　協同して遊ぶことから学び合う活動へ
平成 25 年度	茨城の幼稚園教育　第 39 号　幼児期からの「心の教育」
平成 26 年度	茨城の幼稚園教育　第 40 号　幼児期の健康と安全①－自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養うために－
平成 27 年度	茨城の幼児教育　第 41 号　幼児期の健康と安全②
平成 28 年度	茨城の幼児教育　第 42 号　幼児期で培われた育ちや学びの、小学校生活や学習への円滑な接続
平成 29 年度	茨城の幼児教育　第 43 号　発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育と小学校教育との円滑な接続
平成 30 年度	茨城の幼児教育　第 44 号　子どもの発達を踏まえた言語環境の充実
令和元年度	茨城の幼児教育　第 45 号　特別な配慮を必要とする幼児への指導
令和２年度	茨城の幼児教育　第 46 号　幼児理解に基づいた評価
令和３年度	茨城の幼児教育　第 47 号　保育の質を高める園内研修の工夫
令和４年度	茨城の幼児教育　第 48 号　幼保小の架け橋期における保育・教育の質の向上 ～幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手がかりに～　※　県教育委員会 HP に掲載
令和５年度	茨城の幼児教育　第 49 号　幼保小の学びのつながり　※　県教育委員会 HP に掲載

県主催研修に係る欠席届及び連絡・提出先

※　中堅教諭等〔前期・後期〕資質向上研修、園長等専門研修、保育技術専門研修について欠席する場合に提出する。

1　欠席届（様式）

（様式）

○　○　第　　号
令和　年　月　日

○○○○○長　殿
※（公立幼稚園及び公立幼保連携型認定こども園は）市町村教育委員会教育長あて
（上記以外は）教育庁学校教育部義務教育課長あて

職・氏名（園長又は施設長）
※押印不要

欠　席　届

上記のことについては、下記のとおりです。

記

研修名				
期　日	令和　　年　　月　　日　（　　）			
受講者	園名		職･氏名	
事　由				

2　連絡・提出先

(1)　公立幼稚園及び公立幼保連携型認定こども園

園　長 ↔ 市町村教育委員会 ↔ 教育事務所 ↔ 義務教育課

①　園長は、欠席届（様式）をメール又はＦＡＸで市町村教育委員会へ提出する。
②　市町村教育委員会は、提出された欠席届（様式）を、教育事務所を通して義務教育課へ提出する。

(2)　上記以外の幼児教育施設

施設長 ↔ 義務教育課

・　施設長は、欠席届（様式）をメール又はＦＡＸで義務教育課へ提出する。

「茨城の幼児教育第 49 号」作成協力者

※　敬称略

（令和５年度幼児教育指導資料作成委員）

吉　永　安　里	國學院大学人間開発学部准教授
土　田　美　穂	稲敷市立みのり幼稚園教頭
須　永　百合子	学校法人慈恵学園認定こども園栄幼稚園教諭
馬　籠　美千代	常陸大宮市立美和認定こども園主任保育教諭
星　野　孝　子	学校法人常福寺学園豊里もみじこども園主幹保育教諭
大　貫　奈緒美	ひたちなか市立つだ保育所主任保育士
木　村　美智子	社会福祉法人葛城福祉会かつらぎ保育園主任保育士
松　本　和　弘	鉾田市立鉾田北小学校教諭
石　塚　香　織	境町立森戸小学校教諭
岡　田　あゆみ	常陸太田市立太田進徳幼稚園教諭（研究推進校）
佐　野　晃　代	つくば市立大穂幼稚園教諭（研究推進校）
佐　藤　洋　彰	水戸教育事務所主査
田　﨑　嘉　子	県北教育事務所主査
桂　木　佐知子	鹿行教育事務所主査
藤　岡　洋　子	県南教育事務所主査
田　嶋　貴　子	県西教育事務所主査

（資料提供）

保健福祉部子ども未来課

教育庁総務企画部生涯学習課就学前教育・家庭教育推進室

なお、教育庁においては、主として次の者が本書の編集にあたった。

長　峰　正　道	学校教育部義務教育課指導担当課長補佐
廣　木　一　博	学校教育部義務教育課主任指導主事
野　田　こず恵	学校教育部義務教育課指導主事
寺　田　純　子	学校教育部義務教育課主査
柴　森　浩　志	学校教育部義務教育課主査

茨城の幼児教育　第 49 号

発行年月　2024 年（令和６年）３月

著　　作　茨城県教育委員会

〒310-8588 水戸市笠原町 978 番 6

℡029-301-1111（代表）